

# 第 52 回 特 攻 観 音 年 次 法 要

平成15年 9月23日

世 田 谷 山 観 音 寺  
特 攻 観 音 奉 賛 会

報 告 特 攻 会  
平成15年11月

第57号

〒105-0001 東京都港区  
虎ノ門3-6-8 第6森ビル  
財団法人 特攻隊戦没者  
慰霊平和祈念協会  
電 話 03(3432)1090  
F A X 03(3432)5567

編集人 田 中 賢 一  
発行人 菅 原 道 熙

目 次

第52回特攻観音年次法要 ..... 1

八月十五日の靖国神社 ..... 2

歌人三井甲之の歌碑 ..... 3

宇垣纏の戦藻録抜② ..... 4

父の足跡を追って ..... 9

レイテ空挺作戦に見る忘れられない人々 ..... 10

特攻隊長伍井芳夫 ..... 14

名古屋飛行学校の思い出(続) ..... 17

禅語に接し特攻隊の心情を偲ぶ② ..... 20

安井少尉の御遺族判明す ..... 21

第一御楯特別攻撃隊の全記録抜 ..... 22

ハンガリー日本博物館について ..... 26

特攻平和観音堂改修費寄進者芳名録 ..... 29

事務局からのお知らせ ..... 32

### 式次第

司会 乘兼英史

梵鐘点打三回

大衆着座

式衆入道 金龍山浅草寺一山

国歌斉唱一回

山主願文

誦 経

祭 文

追悼の辞

奉納献奏

献 吟

ラッパ献奏

焼 香

式衆退堂

池前にて誦経

直 会

参拝者

遺族 四三組 五五人

来賓及び会員 三四八人

野口清三

献 吟

吟 石橋一歌

清水谷考尚大僧正猊下

観音寺住職大田賢照

清水谷考尚大僧正猊下他

奉賛会会長 瀬島龍三

白田智子

生田 惇

世田谷区民吹奏楽団

吟 石橋一歌

笛 逢坂竜信

海軍軍装会ラッパ隊

陸 軍 軍 装 会

会長 瀬島龍三

遺族 来賓 会員

誠第十七飛行隊 久保元次郎

昭和二十年四月一日那覇周辺洋上戦死

千代八千代春はめぐれど今日さらば

甲斐なき命花と散りゆく

第十八金剛隊 井上 啓

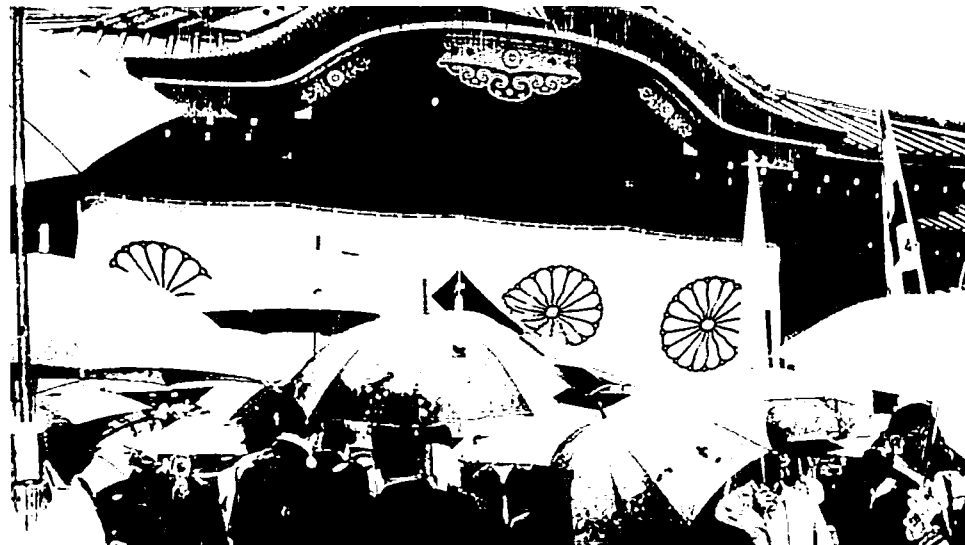
昭和二十年一月五日ルソン島西方戦死

砕けても戦の空にただよはん

みなみの風を我が声と聞け

雨激しく降る

# 八月十五日の靖国神社



この日例年と変らぬ参詣者の群れだが、傘をさしているので余計に混み合い、正午前には大鳥居から拜殿まで進むのに三十分もかかる程だった。

雨の為年寄は出渋ったのか、戦友とおぼしい人は

余り見かけない。殆どが戦後に育った人達だ。

私利私欲、権力欲に走り信念のない政治家共、戦後の教育に洗脳されしかも保身の術に汲々としている官僚の徒輩、日本人であることを忘れ公器を弄ぶマスコミ、亡国の兆しさへ見えていたのに、まだまだ日本は大丈夫だ、お国を支えているのは庶民だという感を深くした。この景況テレビも新聞も報道しない。

中国の内政干渉に屈し総理大臣は今回も参拝しなかった。聖徳太子が隋の煬帝に送った親書、あの精神は絶えていない。いつになったら独立国の矜持を取戻せるのか。



やっと拜殿に辿りつき拝礼する人々。

田中賢一記

歌人三井甲之と「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根を」の歌

田中 賢一

今次大戦末期救国の悲願に燃えて出撃した特攻隊員の、書き残した遺墨にこの歌が見られ、また特攻隊のことを記述した文章にもよく引用されているが、この頃作られた歌ではない。

まず作者三井甲之のことについて述べる。この人は明治十六年甲府市郊外の敷島村に生まれた。一高から東京帝大國文科に学び、明治四十年大学卒業。中学校の教員となり、傍ら歌人としてまた評論家として活躍した。三十三才のとき健康を害し郷里に帰り文筆活動を続け、村会議員や村長などを勤めた。戦後は占領軍の文筆家追放に遭い、解除されないまま昭和二十八年七十一才で没した。

さて人口に膾炙しているますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもる大和島根をの歌は「蔵機関長故福田氏をしぬびまつる」という九首の連作の中の一、首で、昭和二年八月二十四日島根県美保関沖で夜間演習中に、駆逐艦蔵と葦の二隻が衝突沈没し、死者百十九名を出すという大事故があった。そのとき知人の福田機関少佐の殉職を悼んで詠んだ歌

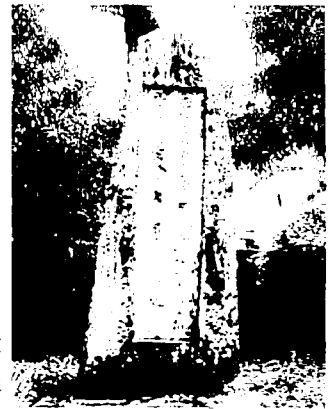
である。祖国防衛の悲願が根底にある歌といふべきか。歌の中核は「かなしきいのち」というところにある。国家の為個人の命を投げ出すことを意味しており、悲しいというような単なる感情ではない。であるから特攻隊員の琴線に触れるのであり、次に一例を示す。

大石政則少尉は東京帝国大学法学部二年在学中に学徒動員で海軍に入り、第十四期飛行予備学生となり任官、八幡神忠隊に属し、二十年四月二十八日97艦攻に搭乗し串良発進、那覇近海の敵艦に突入散華した。この人が母親に宛てた遺書の一節、

「一二三〇発進、沖繩近海の敵輸送船に対し痛快なる突入を決行します仮令途中にて墜されることがあつても、戦果はなくとも、二十代の若武者が次から次へと特攻攻撃を連続しますらをの命をつみ重ねつみ重ねして、大和島根を守りぬくことができれば幸ではありませんか」

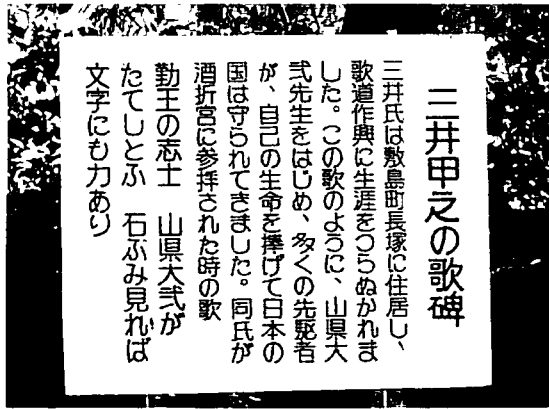
この文中の一節、あの歌を意議しているのは明瞭である。

甲府の西に接する竜王町の山県神社の境内にこの歌碑がある。山県神社は勤王の志士山県大式を祀った社でありこの神社と三井先生との関係は、歌碑の傍らに建つ掲示板にある通り。



歌碑

碑の横にある掲示板



三井甲之の歌碑  
三井氏は敷島町長塚に住居し、歌道作興に生涯をこらぬかれました。この歌のように、山県大式先生をはじめ、多くの先駆者が、自己の生命を捧げて日本の国は守られてきました。同氏が酒折宮に参拝された時の歌  
勤王の志士 山県大式が  
たてしとが 石がみ見れば  
文字にも力あり

主題と関係ないが三井甲之の歌で我が心の響くものを三首ばかり紹介する  
心しる友とかたれば心なごみ  
ながるる涙とどめかねつも

わかるるにふして思へるころはもとはのかたみとわがむねに生くこの歌は別れに際し友は少し伏し目がちに何か思っている。その心も（自分にはよくわかるので）永遠の形見としてとして我が胸に生きつづける。

はらからのみくのために命すてしことをしぬびてつとめ来にけり



山県神社

山県神社の御祭神山県大式は江戸時代中期の尊皇論者、甲斐国巨摩郡篠原村出身、江戸に出て塾を開き兵学を講し、尊皇の大義を説いたが幕吏の忌諱に触れ処刑された。

## 宇垣纏の戦藻録抜②

前号に「最後の決意」と題する部分を転記した。ところで提督が五航艦長官として多くの特攻を推進させた日々的心情を、この日記で偲ぶことは、意義極めて深いものがあるが紙面に限りがあるので、菊水一号作戦の部分を転記するにとどめる。

なおその前に我が協会発行の「特別攻撃隊」の該当部分を転記しておく。

## 菊水一号作戦

わが特攻攻撃にもかかわらず、連合軍の上陸は進捗していた。哨戒、航空阻止の処置が強化され、わが特攻攻撃は3日ごろから著しく困難になった。このうえ敵に沖繩飛行場の使用を許すことになれば一大事である。聯合艦隊は、陸海軍航空全力による総攻撃開始を6日と決定した。この航空総攻撃の成果を利用して、戦艦大和以下が敵上陸地点に殴り込み、第32軍は攻勢に転じて敵を東シナ海に追い落す計画であった。

4月6日早朝から航空総攻撃が開始された。この日沖繩方面に突入散華した特攻隊員は次のようである。

(一)内は出撃基地、機数。  
九州方面からの海軍特攻

菊水部隊天山隊(串良・天山九) 斎藤中尉以下二十七名、第3御盾天山隊(串良・天山二) 吉田少尉以下三名、

第1八幡護皇隊艦隊(串良・97艦攻一四) 山下大尉以下三十九名、第1護皇白鷺隊(串良・97艦攻二三) 佐藤大尉以下三十九名、第1正統隊(第2国分・99艦爆一〇) 桑原大尉以下二十名、

第1草薙隊(第2国分・99艦爆一三) 高橋中尉以下二十六名、第1八幡護皇隊艦隊(第2国分・99艦爆一五) 寺内中尉以下十九名、第210部隊彗星隊(串良・彗星七) 児玉大尉以下一四名、

第3御盾部隊(第1国分・爆戦五、彗星四) 宮本中尉以下十二名、第3御盾部隊(第1国分・彗星) 百瀬中尉以下二名、第1神剣隊(鹿屋・爆戦一六) 松林中尉以下十六名、第1筑波隊(鹿屋・爆戦一七) 福寺中尉以下十七名、第1七生隊(鹿屋・爆戦一二) 宮武大尉以下十二名、第3建武隊(鹿屋・爆戦一八) 森中尉以下十八名

台湾方面からの海軍特攻

忠誠隊(新竹・彗星三) 南一飛曹以下六名、勇武隊(台南・銀河三) 根本中尉以下九名。以上のように、この日海軍航空特攻隊没者は二百七十九名(二六一機)であった。

陸軍の特攻隊没者は次のようである。第1特別振武隊(都城西) 林少尉以下八名、第22振武隊(知覧) 西長少尉以下二名、第43振武隊(知覧) 浅川少尉以下五名、第44振武隊(知覧) 小原少尉以下四名、第62振武隊(万世) 富沢少尉以下四名、第73振武隊(万世) 高田少尉以下十二名、誠第36飛行隊(新田原) 住田少尉以下十名、誠第37飛行隊(新田原) 柏木少尉以下九名、誠第38飛行隊(新田原) 喜浦少尉以下七名、以上六十一名(4式戦八、単一、99襲一六、98偵二六、計六十一機)であった。

海軍航空の特攻に対するすさまじい気魄が感じられる。陸軍も全力を傾注しているのであるが、兵力の集中がまだ進んでいない。

海軍の水上特攻艦隊は6日午後突進を始めた。艦隊には直接掩護の戦闘機は付けられなかった。猛烈な航空特攻の続行によって敵機動部隊を釘付けにし、その間に沖繩への突入を敢行しようとするものである。従って7日も海軍特攻は果敢な機動部隊攻撃を続けるのである。

宮崎からは第4銀河隊三木少尉以下十一名(四機)、第3御盾706部隊徳平少尉以下十五名(銀河五)が、第1国分からは第3御盾部隊富岡中尉以下五名(零戦五)、第3御盾60部隊国安大尉以下十九名(彗星十一)が、鹿屋

からは第4建武隊日吉中尉以下九名(爆戦九)が出撃、沖繩周辺の敵機動部隊を求めて突入した。陸軍では喜界島から第22振武隊の大上少尉、第46振武隊小山少尉以下五名、徳之島からは第44振武隊甲斐少尉以下二名、知覧からは第29振武隊の中村少尉、万世からは第74振武隊伊藤大尉以下七名、第75振武隊大岩中尉以下四名、そして鹿屋からは司偵振武隊の竹中中尉以下二名が、沖繩周辺の敵艦船群にそれぞれ突入した。司偵は海軍に密接に協力していた。

かくして、7日の突入は銀河九、彗星二、爆戦一四計二十四機(五九名)、単四、99襲一六、司偵二、計五十六機(八一名)であり、初日に比べれば兵力不足が目立つ。水上特攻艦隊はこの日の午後九州南西洋上で約三百機の集中攻撃を受け、戦艦大和以下が撃沈され、敵上陸地点突入の雄図はむなしく東シナ海に消えた。

この後も陸軍特攻は上陸地点周辺の艦船に攻撃を続ける。8日、知覧から第29振武隊染谷少尉以下二名、第68振武隊片山少尉以下二名、喜界島から第42振武隊の牛島少尉以下四名、石垣島からは誠第17飛行隊林伍長が、9日は喜界島から第42振武隊の猫橋少尉以下三名、第68振武隊の山口少尉が、石垣

島からは飛行第105戦隊の内藤中尉が敵艦船群に突入した。

このようにして航空総攻撃は不調のうちを終った。第32軍の反撃は成功せず、沖繩北・中飛行場にはすでに数十機の米軍機が進出していた。しかし、敵に大打撃を与えたことは確実であり、聯合艦隊は次期総攻撃を4月10日と定めてその準備を進めた。

菊水一号作戦の特攻機による敵艦船の損害は、米海軍作戦年誌によるだけで、沈没し高速掃海艇1隻、損傷し戦艦3隻、護衛空母2隻、駆逐艦2隻、駆逐艦6隻、高速掃海艇1隻、輸送船3隻、計20隻である。このほかにも敵輸送船団に、相当な打撃を与えたに相違ない。スプルアンズ長官はニミッツ司令官に対し「敵の特攻攻撃の技量と効果とにかんがみ、さらに艦船の喪失と損傷の激増により、今後の敵の攻撃を阻止するため百方手を尽さざるを得ない状況である。ついては第二〇空軍を含む全可動機をもって、九州および台湾にある飛行場に対し全力攻撃を実施されたい。」と報告した。

### 以下「戦漢録」抜

四月五日 木曜日 晴

午前各隊指揮官を集め菊水第一號作戦

の打合を行ふ。長官は出場を断はられ三人雑談に耽る。

長官明日夕刻當鹿屋に將旗を移揚するの電話あり。天下分け目の關ヶ原なれば當然とや云はん。

第三十二軍に其の人ありと云はる、彼長參謀長も遂に我を折り、七日を期し北方に對し攻勢をとる事に決せり(註三十八)。而して航空攻撃を同日に練り下ぐる要望を出せるが之も撤回したり。よくぞ願意せる!

(三)は大和及一水戦(矢矧、驅逐艦六)を水上特攻隊とし六日豊後水道出撃八日沖繩島西方に進出敵を掃蕩すべし命令を出せり。決戦なれば之もよからん。

夕方運動に出で麩倉下の山嶋と會敵、四度目に見事に仕留む。明日の獲物の前兆として氣持よし。

小磯内閣は下評判の八ヶ月を過し本日總辭職を行ひ重臣會議の後、大命は樞府議長鈴木貫太郎氏に降下せり。

(註三十八) 沖繩の戦況を憂慮した大本營、第十方面軍(東臺灣)は極力北中飛行場に向い攻勢をとり之が使用を妨害すべき旨強硬な命令を發し、聯合艦隊長官も同様趣旨の要望を發した。

四月四日第三十二軍も終に願意して攻勢移轉に決したが恰も時を同じくして米の有力な輸送船団が沖繩に近接する

旨通信情報が発せられ、第三十二軍は北方に攻勢をとつている最中に南方に上陸せられることを懼れて又も攻勢移轉を中止したのであった。

四月六日 金曜日 半晴

### 菊水一號作戦

沖繩周辺の敵に對し夜間攻撃を実施し早朝廣範圍の素敵を行ふ。

奄美大島の南方に敵機動部隊二群(空母六隻)を發見控置兵力を攻撃に指向す。午後に至り更に二群(六隻の空母)を發見空母は食はれずして尙一二隻を存したり。

「我空母に體當りす」と云ふ外成果不明なるも敵電話の狼狽振り及救助要求等より空母四隻を撃沈破せる事概ね確實なり。海上視界の状況餘り良好ならず雲量一〇にして敵を發見し得ざりしものは沖繩周辺の敵に向つて特攻するを以て無駄は無きなり。

一方正午過第一波戰闘機(二十七機)隊は敵機の釣り上げを行ひ、第二、三、四(各第一波と同機數)波は沖繩島を制空し、陸軍戰闘機隊(約四十機)は奄美大島線にバリカン運動(行きもどりつするの意)を行ひ何れも特攻隊の進出を容易ならしむ。又陸軍司偵を以て東方に欺瞞紙(錫箔を塗りしテープ、電探に飛行機と同様の反対波を出すもの)を散布す。機動部隊に對する攻撃が南方より掬ひ上げ

の形となりたると共に敵大部隊を南大東島方向に吸引せしむるを得たり。此の慮に乘じ海軍特攻隊は(十航艦の分)百十餘機西方に迂回航路をとりて沖繩の敵艦船に體當り攻撃を行ふ。六航軍陸軍特攻九十機も亦概ね同時刻突入し、八航軍、一航艦の分も亦之に策應したるを以て、沖繩島周辺は全く修羅場となり偵察機の報告は黒煙一五〇本とも云ひよく視認し得ざる状況なるが如し。通信可能の特攻隊は何れも敵戰闘機の攻撃を受くる事無く敵を發見突入せるより見て殆んど大部が成功せるものと認む。此の戦果に策應して陸軍は攻撃開始すべきに總攻撃を八日夜よりとして動かす。

豊田聯合艦隊長官一六三〇着一時將旗を當地に掲揚す。旗は四本となりパラックも手狭なり。草鹿參謀長は徳山に急行、水上特攻隊として八日黎明沖繩に突入すべき第一遊撃部隊に細項を指示し其の出撃を見送りて夕刻歸還、つらき役目を果せり。

第二艦隊の空氣は最初沈滞氣味なりしが伊藤第二艦隊長官の訓示にて其の氣になりたりと云ふ。而して同隊は一八〇〇豊後水道を出撃し九州東岸に沿ひ南下せり。參謀は同隊の行動に對し當隊に迷惑をかけずと云ふも餘は無關心たり得ざるなり。

連關ある作戦に於て出来得る限り友軍をして其の目的を達する如く援助策應するは當然の事に屬す。

四月七日 土曜日 曇  
銀河。

昨日發見の機動部隊は十二隻の空母を含み相當の打撃を與へたるも、彼が積極企圖を有せば北上の算無しとせず。昨夜二五〇哩の夜間索敵を實施し本日の邀撃に備へたるが敵を見ずして終り。

本早朝の索敵に於て昨日の戦場近く(沖繩北端の九〇度八〇哩)エセックstype、特空母一の多量の油を引きつ、南西に四一五節にて徐航するを發見す。正に昨日の損傷艦にして當面の好餌として直に之に攻撃を指向す。索敵機は更に南下して沖繩南東方に空母二及一戦艦を含む部隊を發見し、又沖繩島よりに特空母四隻を發見報告す。午後に至り觸接の目的にて發進せる彩雲は更に損傷艦群の東方に空母二の新群を發見せり。

水上特攻隊たる遊撃部隊は昨夜大隅海峡を通過西航せるが此の間敵潛の發見する處となり特別緊急信を以て敵軍に報道せられたり。本朝〇六〇〇—一〇〇〇間當隊戦闘機を以て敵の觸接機に對する警戒直衛を行へるが其の歸還後敵飛行艇は之に觸接し本日同隊の被攻

撃と憂ひしめたり。只天候西より漸次不良となり輻晦し得る算なしとせずと爲せり。然るに前記新出現の敵空母より進發せりと考へらるゝ戦爆機多數は喜界島附近を通過大和隊に向ひ一二〇〇頃より連續約二時間二一三〇〇機を以て攻撃を加ふ。IYB指揮官發として初霜より大和多數被弾、矢矧魚雷一命中其の他驅逐艦の損害を報告せるが、

次電は初霜より大和更に敵魚雷を受け誘爆瞬時にして沈没すと傳ふ。残るは驅逐艦二隻と航行不能の驅逐艦二隻とあり二水戰司令官驅逐艦に移乗之を指揮し、〇〇は生存者を救助し佐世保に廻航せよと命ず。水上特攻隊は目的地に達する事なく茲に悲惨なる全滅となり。嘗ては山本元帥の聯合艦隊旗艦となり參謀長たる餘は九一年乗艦したる後十九年五月より餘の第一戰隊司令官旗艦となりビアク作戦に、マリアナ海戦に、さては菲島沖海戦に参加奮戦し、尙十一月下旬餘の内地歸還迄乗艦したる懐しの軍艦大和は遂に西海の濠府となり終ぬ。伊藤整一長官、森下信衛參謀長、有賀幸作艦長以下餘の嘗ての部下たりし多數精練の乗員と共に。嗚呼！餘は同隊の進撃に就ては最初より賛意を表せず、〇〇に對しては抑へ役に廻りありたるが今次の發令は全く急突にして如何とも爲し難く、僅に

直衛戦闘機を以て協力し敵空母群の攻撃を以て之に策應する外道なかりしなり。

全軍の士氣を昂揚せんとして反りて悲慘なる結果を招き痛憤復讐の念を抱かしむる外何等得る處無き無暴の擧と云はずして何ぞや。退嬰作戦に於て殊に燃料の缺乏甚しき今日に於て戦艦を無用の長物視し又厄介なる存在視するは皮相の觀念にして、一度攻勢に轉せば必要なる事故が戦艦の多數を吾等の眼前に使用し第三十二軍は戦艦一隻は野戰七ヶ師團に相當し之が撃滅を度々要望し來れるに徴するも明なり。即ち航空専門屋等は之にて厄介拂したりと思惟する向もあるべきも尙保存して決戦作戦等に使用せしむるを妥當としたりと斷するものなり。抑々茲に至れる主因は軍令部總長奏上の際航空部隊丈の總攻撃なるやの御下問に對し海軍の全兵力を使用致すと奉答せるに在りと傳ふ。帷幄に在りて籌畫補翼の任にある總長の責任蓋しけい輕しとせざるなり。敵機動部隊に對する攻撃は約三十機程度の各種特攻を以てしたるが損傷空母は勿論新出現の空母或は南方の敵等に期せずして目標配分の状況となり通信可能の彗星六、銀河十一の空母突撃を報ずるあり。陸軍司偵(攻撃機に轉用)二機も加はり、爆戦の物も言はずして

突入せるものもあり、敵信によりても二隻沈没、二隻損傷を探知し得るを以て本日の攻撃は數隻撃沈破の偉功を奏したるを信ず。大和以下にて殉職の將士以て冥すべきなり。昨日の沖繩周邊攻略部隊に對する成果は第三十二軍より左の通打電し來れり。

嘉手納西方海面、糸満南西海面、沖繩南方海面を合して本朝來の合計  
轟沈 戦艦一、艦種不詳二、大型三、小型二、計九隻  
擊沈 T五、艦種不詳一  
擊破 戦艦一、炎上 驅逐艦一、輸送船六、小型一、艇種不詳九、計一九  
總計三四隻 海軍艦船二、火柱一四本、爆發三あり。  
特攻の大部突入せるとせば尙他に損傷を蒙りたるもの相當に存すべく敵にとりては大打撃なり。尙本日も陸軍特攻約七〇機突入せり。(註三十九)。陸上の士氣大に振ふ。緊揮一番獅子奮迅の勢を以て上陸軍をはたき落すべし。  
天皇陛下におかせられては戰捷御祈念の爲高松宮殿下を御名代として伊勢大廟に御參拜あらせらる旨長官限り内示の電あり。  
七日東京御出發、八日御參籠、九、十日御祈念  
御御念の程誠に恐懼の至、十七年ガ島戰中御親拜あらせられたる際、山本聯

合艦隊長官の思は正に今日餘の思なり。益々奮勵以て大一號作戰の完遂により聖慮を安んじ奉らん事を期す。

本日各B-29の百機以上はP-51を伴ひ、一群は帝都荻窪方面、一群は名古屋を襲へり。蓋しP-51の随伴は今回を以て噴矢とし硫黄島より同行せるものと認めらる。

(註三十九) 既刊の米軍戦記にはこの戦闘の詳細を記したものが無い。キング元帥報告書(下巻三二頁)には簡単に次のように記している。

敵の航空攻撃は最初の數日間殆んどなかつたが四月六日になると日本空軍は地上及支援部隊に對して猛烈な攻撃を行つた。四月七日機動部隊は悪天候を冒して東支那海で日本艦隊に烈攻を加えたが、日本空軍の大攻撃で空母ハシコックは命中弾を受け、又特攻機一機が飛行甲板に衝突して大損害を蒙つた。

四月八日 日曜日 小雨後曇

春雨地を濕した後、終日どんよりとして南西諸島飛行不適、素敵追撃の手及ばざるを憾む。之に反し一〇〇〇頃都井岬の南東より敵數群近接し飛行場より相當離れたる村落に小型爆彈三〇個程度投彈、野良仕事の農夫を仆し御眞影奉安の小學校長を殉職せしむ。蓋し雲上よりする盲爆にて遂に其の機影を

認めず、結局はマリアナよりする大型機と判定せり。蓋し南九州の航空勢力か南西諸島の敵攻略に與へつゝある打撃に對し、當然豫期すべき大型機の協力なり。松山三四三空は源田司令之を率る本日鹿屋に進出し飛行場の不良を克服して今後紫電の妙技を揮ふと云ふ。艦上機たるとB-29たるを問はずた、

油揚をさらはれてポカンとなる人士無きを保し難し。自ら求むべからず、押されて出るを要諦とすべきなり。人の好き海軍が苦難の時機を擔當する事となりたる以上強力なる爲政を望むや切なり。之れ現下萬人の聲なればなり。艦の無き海軍は先輩を以て内閣を組織し此の危急と闘ふか。呵々。

作戰の大成功を祝するものなり。第二軍も昨夜來攻勢を開始し陣地内の敵を撃攘、神山島に切り込を行ひ重砲二門を破壊せりと云ふ。茲で陸上が最大限に頑張り我麾下航空勢力繼續せば天一號作戰の完遂期して疑はざる處なり。午前豊田長官と懇談し草鹿參謀長にも同様の事を述ぶ。偶々大海機密〇九一

四月九日 月曜日 雨

本日南西諸島方面に活動せる敵艦上機數は沖繩本島を合せ延一六〇機程度にして著しく低調なり。昨日の攻撃狀況調査の進捗と共に殘存空母は二群程度と推定せらる。此の際に於て一二撃を加ふるを得ば敵ESBを壊滅し得る事明なり。只兵力の續かざるは如何にも残念とすべし。午後指揮官を會して明日の對機動部隊攻撃、十日豫定の菊水第二號作戰を練る。

終日春雨に過ぎたる雨日となり、飛行機はぬれ鼠、戦は支部の兵隊と同様に傘なくては出来ぬなり。雨中の飛行視界不良を突破する霧中飛行に關し今後勘考する處なかるべからず。

屢次の我猛攻撃に依り敵の陣營に一大動搖を惹起しつゝある情況に鑑み、第三十二軍の總攻撃とも關連、萬難を排し戦機を失せず總追撃に轉移するを適當と認めあり。

沖繩の第三二軍は今夜より攻撃開始を公言す。大言壯語する反面、人に依存せんとする同軍が何れ丈け反攻の實を舉ぐるや、眉に唾して待つべし。

名護灣口瀬底島、伊江島各々d・cを基幹とする艦艇灣口掃海並に偵察中、一五三〇我特攻と認めらるゝ攻撃を受け其の大部轟撃沈、左の通

機材の補充特攻裝備等に就ては極力促進中。

不詳×1

(一) 轟沈 c×3, d×5, W×3, 不詳×1

又GE電令作第六二〇號は右に次で發令あり。

大命を奉じ鈴木貫太郎大將昨夜組閣を完了せり。米内海相の留任、豊田貞次郎大將の軍需兼運通省入り、左近司政

(二) 撃沈 d×3, 不詳×7

一、諸情況を綜合するに敵は動搖の兆ありて、戦機は正に七分三分の兼合にあり。

三中将の國務大臣等正に海軍内閣と稱すべし。小磯内閣の組閣當時重臣の間

(三) 大破炎上 B×2, c×6, d×2, w×2, 不詳×1

二、聯合艦隊は此の機に乗じ指揮下一切の航空戦力を投入し、總追撃を以て飽く迄天一號作戰を完遂せんとす。

に此の次は海軍にお願ひするとの話ありたる事正に實現せるものと云ふべし。

合計三五隻 他に残波岬西方海上に輸送船多數炎上しあるを發見す

III、IKFGB、SEFGB、及GAF(第五、第一航空艦隊及第六航空軍)各指揮官は密に協同し、指揮下(作戰指揮を含む)全力を擧げて既令任務に基き

輸送船多數の損害あり。今次菊水一號

前記の分と合し合計六九隻を視認し尙

執拗なる作戰を繼續すべし。

四、3AF、10AF、13AF、GEB  
 (第三、第十、第十三航空艦隊及護衛總隊) 横領各司令官は一切の手段を盡し、夫々指揮下後續兵力の作戦可動を促進し既令軍隊區分に基き本作戦に集中すべし。

五、JUB (第一輸送航空部隊) 指揮官は全力を擧げて本作戦補充機材の整備及空輸に任ずべし。

右二電共全々我意を得たるもの我懐さへ温まれれば極めて割のよき戦なり。全軍の指揮益々揚る。

海上特攻隊戦闘概報は敵機撃墜確認一九、被害大和、矢矧、濱風、霞、朝霜、機故故障分離中敵機と交戦(沈没の算大) 涼月大破。

人員救助 司令部參謀長、砲術參謀、副官外一、下士官兵三。

大和副長以下准士官以上二三、下士官兵二四六。

失矧艦長以下准士官以上三七、下士官兵四六五。

SCD司令官異常無し。磯風進士官以上全員、下士官兵三二六。

濱風驅逐艦長以下准士官以上一二、下士官兵二四四。

霞驅逐艦長以下准士官以上一五、下士官兵三〇五。

四月十日 火曜日 雨後曇

連雨三日午前の雨量相當大にして午後半にして止む。本日亦支那兵に劣るものあり。攻撃のみか集中もならず、菊水二號作戦の豫定日を更に十二日に延期するの已むなきものあり。

鷺の音も濕りけり雨三日 春雨に飛行機めれて憩ふかな 降り過ぎや決戦の敵春の雨

午後司令部主幸にて航空關係諸事項に就き打合あり。 中城灣の海軍射撃が侵入し來れる敵艦隊に空襲下攻撃を加へ驅逐艦一撃沈、掃海艇一を撃破せるは大昔の戦備を復活して意氣を表はせるものにして面白し。

獨逸に對する西部戦線は一層急迫し國內への侵透著るし。頑張るべし、獨逸! 腹背敵を受けて猶毅然たるを望む。ソ聯は數日前日本大使を招致し情勢變化したる今日、日ソ中立條約は其の意義を失ひたりと有効期間一年前廢棄の意志を通告し來れり。當然豫期したる處、斯くして四月廿五日桑港に開催せらるる、反樞軸國の戦後經營對策會議に臨まんとす。

獨逸の運命、歐洲の紛糾一繩張競争、ソ聯の意慾等々世界の移動充分なる注意を表す。

四月十一日 水曜日 晴

陽日のうら、かさ作戦區域概ね天候回復す。いで機動部隊狩りと出かけん哉。即ち早朝より東海及列島線南東方面を索敵したるが〇九三〇喜界島南方七〇哩附近に正規二、特一の空母を含む一群を發見し、戦闘機隊約六十機を先行せしめ續いて晝間攻撃隊として約四十機を發進せしめたり。

制空隊は喜界島上空にてF6F八機と交戦し攻撃隊は一三五〇より一七〇〇の間、概ね攻撃を決定、空母に突入を報せる戦爆特攻(五〇番裝備)七機、彗星四機、艦船に突入を報せしもの戦爆三機なり。此の報告を聞く時は空母の全滅を偲ばしむるものあり。觸接機も友軍機の突入を認め、防禦砲火スコールの如く熾烈にして黒煙二條昇騰するを認めたるも、敵戦闘機の妨害により戦果の確認不能なり。

午後の索敵に於て喜界島の一〇〇度約五〇哩に於て更に空母二隻を含む一群を發見、更に一六三〇喜界島南方三〇哩に空母三を含む一群を見る。晴れたりと雖も尙視界不良彩雲も五十米の高度にて這ひ廻りたる由なれば充分なる索敵不能なりしも敵は三群よりなる事概ね確實となれり。あれ丈け空母に突入を報じ乍ら次々と平氣なる空母は例へ四船としても健在し得ざる理なり。

一五三〇より一八〇〇迄重爆銀河天山計三八機薄暮攻撃に發進一八五〇より遅れて一九二〇迄雷爆撃を行へり。巡洋艦三隻沈戦艦又は大型巡一大火災、巡一、驅二に魚雷を命中せしめ夜間尙炎上艦三を認めたるものあり。

今日こそは今日こそはと大口あけども食ひきれぬは敵の機動部隊なり。菅原第六航空司令官司令部に連絡の爲來隊一三〇〇頃博多に歸る。

敵は津堅島の外名護灣及連天港方面より上陸し伊江島を制する我陸上砲臺の占領にかゝれり。

一五三〇より一八〇〇迄重爆銀河天山計三八機薄暮攻撃に發進一八五〇より遅れて一九二〇迄雷爆撃を行へり。巡洋艦三隻沈戦艦又は大型巡一大火災、巡一、驅二に魚雷を命中せしめ夜間尙炎上艦三を認めたるものあり。



神風特攻・菊水天山隊 航空総攻撃・菊水1号作戦発動の日 串良基地から魚雷を抱いて飛び立つ「天山」艦攻 (昭和20年4月6日・靖国神社蔵)



## 父の足跡を追って (宮崎から宇佐へ)

片瀬 昌美

平成15年4月6日、桜の花びらがひらり、ひらりと舞う中での第二十回宮崎特攻基地戦没首慰霊祭も無事終わり、念願の大分宇佐空跡に行ってみることにしました。父、大井良美は、昭和20年3月27日未明、銀河に乗って沖繩の海を目指す前、宇佐空で実用機配置の厳しい飛行訓練を受けていたと言われています。大分では由布院のたっぷりした湯に浸かりながら九州の春を満喫いたしました。夜はお部屋で今回の大分をご案内をして下さいました渡辺クミ様とお食事を頂きながら当時の事をいろいろ伺いました。渡辺様の頬に、私の頬に何度涙が流れたことでしょうか。五十八年前の回想の夜が静かに更けていきました。

翌日は、いよいよ宇佐です。宇佐駅では渡辺様の女学校時代のお友達が待っていてくださいました。先ずは宇佐神宮へ、宇佐空の隊員は必ず皆、必勝祈願で一度はこの神社を訪れるといわれる八幡宮の総本宮です。父も、もちろん参拝に訪れたでしょう宇佐神宮は日本人の心のふるさとそのもの、日本の神社でした。二礼二拍手一礼をして

お賽銭を入れ宇佐神宮を後にしました。

宇佐空へ。宇佐空跡は広大な宇佐平野の中にありました。遙かかなたには山々が連なり八面山がその特徴ある頂上をかすかに私に見せてくれました。

八面山は福岡県と大分県の境目であり中津平野が終るところに突然盛り上がるように聳えているので海拔699メートルのその姿をさえぎるものが無い。

其の姿は航空母艦を想像させる姿でどこから見ても同じ形に見えると言う。

この山を目標として毎日激しい飛行訓練が繰り返されたといえます。私はじつとこの山の頂上を見つめました。若いパイロット達はどんな気持でこの山を見つめて飛行訓練を繰り返していたの

だろうか?どんな気持か?などと思う心の余裕も無かったのかもしれない。

死と隣り合わせの訓練だったのだろうと想像します。多くの飛行士の決死の

まなざしを一身に受けたこの山は五十八年前と同じ姿で今も佇んでいました。

父が死に物狂いで飛行目標としたこの山はここで起きた総てのことを其の腹

の中に押さえ込み、何事も無かった、無かったのだよと私に言い聞かせているようでした。八面山さん、隠しても

駄目、私は知っているのだからと私は山に向かって反発していました。宇佐

空の総てを知ってるこの山に。

地上に残された掩体壕の中には、ぼつんと一つ飛行機の錆びたプロペラが置かれていました。宇佐海軍航空隊の滑走路に重なるように建設された道路脇には滑走路跡の記念碑が建てられ平和への願いと刻まれています。この場所はかつて関係者が帽子を振って特攻機を見送った場所だといえます。航空機踏み切りと書かれた計器箱、これらの物が今わずかに、ここに五十八年前、

本当に鬼の宇佐空があった事を物語ってくれています。初めてここに送られてくる若き隊員は柳ヶ浦駅で休が固まってしまふといえます。最初の一步の足

が出てこない。どんな厳しい訓練が彼らを待ち受けていたのでしょうか?当時の事を想像するのは私には無理でした。今は、平和な宇佐平野が目の前に

広がります。道路わきには黄色い菜の花の群生がひっそりと咲き、はるかかなたの山並みは霞んでいました。八面

山も知らん顔してそっぽを向いています。「お父さん、鬼の宇佐空で良く頑張ったね。」のどかな日本の春が広がっています。

最後の日は耶馬溪を訪れてみました。禅海和尚がのみと槌だけで彫ったといわれる青の洞門をくぐり抜けると溪谷

と川の流れの美しい雄大な自然が広がり心を穏やかにしてくれます。昔と変

らない景色だといえます。行く手左は絶壁の石の溪谷、右手には清流が流れます。上陸した隊員たちは激しい訓練の合間を縫ってどんなにこの自然の中で心が和んだ事でしょうか?「お父さん、花の香りに酔いましたか?」ゆっくり一歩ずつこの清流に沿って歩き自然に体を委ねる喜びに浸っていたこと

でしょう。川畔の宿、天幸閣は上陸の際、父が仲間とよく訪れていた旅館です。父の軍服姿の写真はこの旅館の玄関前で撮影されており、父は同期の桜

たち、旅館の皆様とご一緒でくつろいだ感じで写っています。この一枚の貴重な写真はこの旅館で大切に保管されていました。九州の旅は父への慰霊の旅・私の心の旅となり生涯忘れられない思い出となりました。

最後の日には耶馬溪を訪れてみました。禅海和尚がのみと槌だけで彫ったといわれる青の洞門をくぐり抜けると溪谷と川の流れの美しい雄大な自然が広がり心を穏やかにしてくれます。昔と変



1(父) 大井良美

## 今期の戦史 ④

### レイテ空挺作戦に見る

#### わすれられない人々

田中 賢一

#### 挺進第三聯隊長白井恒春中佐

19年10月20日敵がレイテに上陸するや三日後の24日、挺進第三聯隊に動員が下令された。第二挺進団動員の第一陣である。続いて第四聯隊と飛行戦隊、更に挺進団司令部にも動員が下令されることは判っていた。第三聯隊は空母で南方に向うことが大本営から示されたので、団司令部の部員に内定していた私は、その晩の夜行で佐世保に行った。私共の部隊の所在地は宮崎県児湯郡川南村である。

空母は隼鷹で私は翌日到着した聯隊の搭乗を見送った。白井聯隊長には追って私も参りますと言って別れた。白井さんは十期も先輩だが高鍋町の借家が隣なので、家族ぐるみのお付き合いだった。私が司令部の部員から外され比島に行かなかったことは、後から述べる。

レイテ空挺作戦は12月6日に行はれた。その頃は既に島の東半部は敵に占拠されて、カリガラ湾沿いに西進する敵に対し第一師団がリモン峠で懸念に防いでいた。彼我の戦力は隔絶してお

り、我が方が攻勢に出る力などある筈がないのに、マニラに在る第十四方面軍では、第一師団の次に送り込んだ第二十六師団を、山越えてブラウエン地区に進出させ、東部平野に攻勢を執ることを現地の第三十五軍に命じた。この作戦を「和」号作戦と呼んだが、その先駆けとしてブラウエン地区の三つの飛行場に挺進団の主力が降下することになった。

降下部隊はルソン島クラーク地区のアンフレレス飛行場を発進しレイテに向かった。聯隊長は第一中隊と作業中隊を率い、夕刻ブラウエン北飛行場に降下した。間もなく夜になり集結ははかどらなかつたが、聯隊長は掌握した約六十名をもって地上の敵機や集積燃料などを襲撃し、一時飛行場を制圧した。夜半第二次挺進部隊を誘導するため、燃料を燃やしつつけたが輸送機編隊は現れなかつた。基地では帰還した輸送機(それは極く少なかつたが)に降下部隊を載せ発進させた。しかし天候悪化しレイテに進入できなかつたが、聯隊長は知らなかつた。

降下と同時に第十六師団の残存部隊が北飛行場に突入すると聞いていたが、一向に現れない。実は同時に降下した本部付の土屋少佐は七十名程掌握し、突入して来た十六師団の切込み隊と合

流したのだが、聯隊長の一群とは一緒になれなかつた。降下直後の戦闘の真相である。

聯隊長は翌日回復攻撃に出た敵と戦闘したが北飛行場の確保を諦め、南飛行場方向に前進したが、ここに降下した筈の第二中隊が見えない。そこで山越えて進出すると聞いていた第二十六師団を求めて更に南下した。師団と名がつくからには堂々たる部隊を想像していたが、この師団は上陸時空襲で輸送船が沈められ、着のみ着のまま上陸し、切込み以外戦術はなかつた。そんなことを方面軍や第四航空軍は知っていたのか、挺進団には何の説明もなかつた。

聯隊長一行は各所で敵と交戦し兵力減少し、18日になって二十六師団の重松大隊と出会い、新たに有力な敵が西海岸のイビルに上陸し、我が後方基地オルモックが危うくなつたので、和号作戦は取止めになつたことを知つた。

まだブラウエン地区に降下部隊が残っているかも知れぬと後髪を引かれる思いをしたが、重松大隊と同行し二十六師団司令部がいて聞いた二八七高地に向かい西進した。

途中二十六師団の他の大隊とも出会い残存部隊はカンキポットに來れという三十五軍の指示を伝え聞いた。ここ

から四七日もかけて山の中を潜行しカンキポットに辿り着く。米軍指導のゲリラがいるので平地には下りられない。木の芽や草の根を食み言語に絶する苦難に耐え、1月26日カンキポットに着し、それから九日後に陣没している。

この人の偉いのはここにあると思う。ブラウエン地区の戦闘について詳細な手記を認め、これを後世に残そうとする一念だけで行動していたのだろう。実は和号作戦が打切られた後、ブラウエンに後続する為準備していた第四聯隊は、オルモック北方のパレンシヤに降下して三十五軍の増援に使はれた。東部平野に降下した者に一人の生還者もないが、第四聯隊には後に軍司令部の護衛としてセブに脱出した者の中に戦後の帰還者がある。白井聯隊長は死ぬ前に四聯隊の斎藤副官にこの手記と軍司令官からもらった感状を托したので、戦後持ち帰ることが出来た。

更にブラウエン地区の戦闘の模様や潜行の苦しさなどカンキポットで四聯隊の者に語つたことが、戦後伝えられた。その中で私が最も印象が深いのは、山中の潜行で疲労困憊ものを言う元気もないとき、白井聯隊長は鼻歌を口ずさむのでまた元氣を取り戻したという。どんな歌かは伝はっていないが、私はこの人が酒に酔うと箸で食器を叩きよ

く唄った歌を思い出し、体力極限の状態になっても、それは部下を励ます作爲であつても、座敷で唄った気持を失はなかつたのに感銘深いものがある。部下の人望は絶大だつた。四聯隊の隊長以下七六名がセブ島に脱出するがその時作業中隊長の香月大尉は三聯隊の作業中隊長蓬田大尉を連れて行くとした。蓬田大尉は一年先輩で同じく工兵だつた。蓬田大尉は栄養失調で動けなかつたが、聯隊長の死んだこの地で死ぬと言つて応じなかつたという。私は戦後二回ブラウエンやカンキポット(但し山麓のマハンラクという慰霊碑のあるところまで)に行き、白井さんの霊を弔つた。

第二挺進団司令部部員稲本宏少佐挺進第三聯隊を空母準鷹に乗せる為私が佐世保に向いたことは既に述べた。帰つて徳永大佐に復命すると「稲本が戻つて来て、是非連れていってくれ」といふので部員を譲れ」と言はれる。まだ挺進団司令部の動員は下令されてないが、司令部は陸軍挺進練習部で編成することになっており、その要員は戦時命課でまゝつていた。団長は練習部の高級部付の徳永大佐、練習部付の私は部員と予定されていた。稲本少佐は三聯隊編成当初から聯隊

付だったが、一年程前に航空士官学校に転出した。ところが今度の動員で人が不足すると中央で思ったのか、挺進練習部付として戻されてきた。そして彼がいうのには、田中は初期司令部々員として出征しているの、今度は自分を出してくれと、徳永大佐に食い下がつたということだつた。私が就く筈の部員は編制表では少佐となつており、彼は私より一期先輩で少佐、私はまだ大尉である。そんな経緯があり私は残された。司令部は何日か後新田原を發ち、私は見送つた。

この人との御縁は、私共が17年6月南方から帰り復員し、私は挺進練習部の教育訓練担当の幕僚となつたときである。稲本さんは三聯隊の教育主任だつた。私は各聯隊の担当者を集め教育訓練の指示をすることがあつた。そのよくな時は私より先輩だが謙虚に私のいうことに従つてくれた。

さて、司令部がルソン島アンフェレスに到着し、同時に着いた第三聯隊を掌握し、作戦準備を始めたのは11月12日だが、挺進団の所屬している第四航空軍でも、第十六方面軍でもレイテの地上の状況を全く掌握していない。第一レイテ決戦だと部隊を注ぎ込んで、方面軍の参謀誰一人としてレイテに行こうとしない。和号作戦が決定し

たのは11月23日であるが、現地の地形と状況をよく掌握していたら、あのよくな計画を作る筈がない。方面軍の参謀が図上戦術をやっているようなものである。そのような内幕を挺進団司令部がど



白井聯隊長  
アンフェレスの宿舎に寛いだ一時



30年後に見たブラウエン北飛行場の弾痕の跡が残る椰子



カンキポット 山麓の慰霊所



カンキポットの岩山

の程度察知していたのかわからないが、兎に角マニラの上級司令部に向いても、レイテの地上戦況がさっぱり判らないので、稲本少佐は自分かレイテに行つて挺進部隊の運用について意見具申すると言い出した。徳永団長もブラウエン飛行場が奪取できたら自分もそこに乗込む積りだったので、司令部の先発として稲本少佐をレイテに派遣することにした。しからばどういう方法でレイテに行つたのか私はかねてから知り度いと思つており、既に故人になっているが当時高級部員だった弘中少佐に尋ねたが、確答を得られなかった。ただ輸送機を出して降下したことはなしとの証言は得た。

しからば船ということになるが、いつ着いたのか、第四聯隊のオルモック増援の第一回降下は12月8日であるが、このときはバレンシヤの降下場に三五軍司令部から誰も来ていない。次は10日に第四聯隊長以下が降下したが、そのときは稲本少佐がいたという証言があるので、その少し前に到着したと想像する。空挺運用について意見具申する時期はとくに過ぎていた。

オルモックが敵に取られた後、その北に二六師団の今堀支隊と挺進第四聯隊が陣地占領して敵の北上を拒止していたが、16日今堀支隊の陣地が突破

され、敵は怒濤のように突進して17日朝フアトンにあった軍司令部を襲つた。このとき稲本少佐は司令部の兵を指揮して戦い、戦死してしまふ。軍司令官や幕僚は辛じて遁れることが出来た。このときの模様を軍参謀だった渡辺利亥氏(故人)は戦後私に語つた。稲本少佐は司令部の者ではないので難を避けてもよいのに、卒先敵に当りその間に我々は西方の山に逃げ込んで無事だった。彼らしいと思う。

なお渡辺参謀は司令部をミンダナオに移す意図で特命をうけ、海軍の潜航艇で先発し数少ない生き残りとなつた。私は多くの資料をこの人から得た。

タクロバン特攻隊長榊原達哉大尉  
私は19年6月から挺進練習部に設けられた下士官候補者隊の隊長をして、練習部所属は私一人で区隊長以下全員聯隊から派遣されていた。その中に榊原中尉がいた。彼は並み外れの激しい性格の持主だったが、任務には極めて忠実で教育は熱心だった。榊原はいつも心にわだかまりを持っていた。

18年6月18日のことである。挺進第四聯隊では榊原中尉が計画し指導した小隊訓練が行はれた。降下して高鍋町にある軍事施設を占領するという構想で、途中小丸川を渡渉する場面があつ

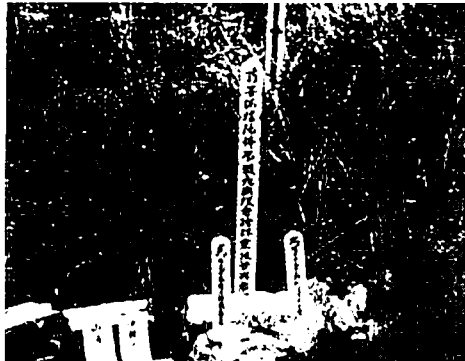
た。勿論事前に自ら渡渉して確かめてあつたが、山間部に大雨が降り増水していたので、押し流され八名が殉職してしまつた。聯隊から救援隊が来てから、彼は軍刀で自決しようとしたが、聯隊長が付けてあつた監視係に取押えられ果さず、戦場にいくらでも死ぬべきはあると諭され思い止まつたが、爾来このことが彼の脳裏に重くのしかかつていた。

榊原は小丸川の堤防上に私費を投じて慰霊碑を建てた。計画を知つて同僚も資金援助をしたが、人々は今も榊原が建てた碑と呼んでいる。戦後堤防改修のため台上の高鍋大師の境内に移され、苔蒸して建つてゐる。

さて愈々戦場のことになる。挺進第四聯隊は19年12月2日アンフェルスに到着した。初の計画では三聯隊だけを使つて四航軍から示されたブラウエン地区の飛行場を奪取し、四聯隊は増援に使う積りだった。その頃レイテに向かう船団が片っ端から敵航空に沈められ、敵航空の主基地はレイテ湾沿いのタクロバンとドラグにあることが判明したので、この二目標を追加すべきである、と言う意見が主として四聯隊の中隊長級指揮官から上つた。榊原はその少し前に大尉に進級したので本部付になつてしたが、この主張者の一人だつ

た。  
ブラウエン地区に降下する部隊は、残存している十六師団や山越えて進出したがレイテ湾沿いまで地上進攻出来るとは誰も思つていなかった。敵飛行場を制圧出来ても、最後は討死である。

小丸川殉職碑



タクロバン飛行場を望む台上で香華を供う

それなのに俺にやらせろ、俺の部隊を使ってくれ、と名乗り出ている。結局タクロバン攻撃隊長は榊原にきまった。人々は当然の事と思った。

徳永挺進団長は榊原に敵に打撃を与えたら、潜行してタガミ西方まで来い、そこには十六師団の部隊がいる筈だから、死に急ぐ勿れと言ったが、刀の目釘の続く限り戦いますと答えたと言う(部員弘中郁夫氏談)彼の切口上の言い振りを私は思い浮かべる。

小丸川で死んだ八人の位牌を抱いて輸送機に乗り込んだ彼の姿は、語り伝えられているが、その後のことは全く判らない。

挺進部隊全戦死者を祀ってある川南護国神社の例祭に、私は毎年参列しているが、小丸川や高鍋大師にある碑を見ると榊原の姿が浮かんでくる。彼は精気溢れる青年将校。こちらは老毫。

次の絵は榊原とご縁があった当時の延岡高女の人達が、彼を主題にしたビデオを作ったが、その中の一場面。このことは会報25号と26号に紹介済み。



8人の位牌を抱いて



小丸川で自決しようとするところ

レイテに咲く花

一 神の歩みし日向路に  
秋の祭の夜は更けて  
飛電は告ぐる捷一号  
今宵名残の笛の音は  
庭の山椒に 鈴懸し  
想いの人よわが胸は  
武夫の道ふみゆかん  
疾き事風の如くいぬ

二 ①今日咲きて明日散る花」と若人の

②悲しき命積み重ね」  
神風呼ぶか 特攻に

③雲染めて屍悔いなく散る」という

サンフェルナンドの壁の文字

日指す主力はブラウエン  
サンパブロ ドラグ タクロバン

三 三鵬翼千里 南冥の

空を圧して進めども

逆巻く砲火如何んせん

辛くも降りし 百余名

ブラウエンに屯せし

敵雑軍は蹴散らせど

後援続かず補給なく

剣は折れて矢弾尽く

四 坂山蓋世の勇あるも

時に利あらず難逝かず

捨つる命は軽けれど

青史に一言残さんと

五十余日の山越に

聯隊長の 一行は

カンキポットに辿りつき

五 一番乗りは譲りしも

ブラウエンに続かんと

思いは走せる決戦場

命 忸然と下りしは

オルモックの急救うべし

大廈崩るに似たれども

五百の精兵 欣然と

バレンシヤに舞い降りぬ

六 勝に驕れる 敵兵を

渦巻き返す 反撃に

軍司令官の 一行は

危く虎口を脱したり

二万の敵の 猛攻に

激闘二旬 食もなく

最後を飾る切込みは

敵心胆を 奪いたり

七 レイテの空に咲きし花

舐高き つわものの

色よ香よ 今いづこ

人の心はうつろえど

④「あらわさん太刀のほまれ」と

うたいつつ

勇躍往きし 若人の

遺烈は永久に伝うべし

その名高千穂空挺隊

① 今日咲きて明日散る花のわが身かな  
いかでその名を消くとどめん 詠人不知  
② ますらをの悲しき命つみかさね  
つみかさねまもる大和島根を 三井甲之  
③ 花負いて空うち行かんまてめん  
かばね情いなく奇う散るなり 詠人不知  
④ 英わさん時はきりにけり千早振る  
神につかへし太刀のはまれを 挺う佳善孝大尉

白田智子著

「特攻隊長 伍井芳夫」

田中 賢一

会員白田智子さんからこの本を贈られた。白田さんは昨年沖繩慰霊行で知り合った人である。

第二十三振武隊長伍井大尉は20年4月1日知覧出撃、慶良間列島南で敵艦に突入した。少侯20期、明治45年生れ、三児の父だった。この書物に出ている遺書と著者の述懐について、了解を得てここに紹介する。

父は航空操縦者として、普段でも教導の場でも、常に覚悟ができていたこ

—父と母の生きた時代—

特攻隊長 伍井芳夫

白田智子



書物の表紙

とは明らかである。しかし、発って再び帰ることのない特攻操縦者になることは、母や、父の母、また家族にとって心構えに格段の違いがあった。

父は母に、特攻隊員になるとは一言も告げなかった。父よりもはるかに操縦の経験の乏しい人たちが次々と苛烈な戦場に送り出され、あるいは特攻隊の編成に加えられるのを間近に見て、教育の場にいられなかった。年齢、独身であること、長男でないことなどが特攻要員選抜の基準だったが、若い者だけにこの重庄を負わせてはならない、また、妻子四人を残して行くことは大変辛い、大義のために行く、父は決意したのだ。兄(伍井祐<sup>ウヰノ</sup>佐<sup>サ</sup>矩<sup>ノ</sup>)にす

べてを頼み、母には直接話さなかったのだ。

【遺書(昭和二十年三月九日)】

物ノ道理ガ解ル年頃ニナッテカラ知ラセヨ

芳則ニ一筆遺ス

父ハ大東亜戦争ノ五年目ノ春 名譽アル特別攻撃隊第二十三振武隊長トシテ散華ス

オ前達ノ成長ヲ見ズシテ去ルハ残念ナルモ悠久ノ大義ニ生キテ見守ッテイ

ル 良クオ母サンノ謂イ付ヲ守ッテ勉強シテ日本男子トシテ 陛下ノ御子トシテ立派ニ

成人シテ下サイ

将来大キクナッテ何ヲ志望シテモ良シ 唯父ノ子トシテ他ニ恥ザル様進ミ

ナサイ

オ母サンニハ大変ナ苦勞ヲ掛ケテ頂イタノデス 御恩ヲ忘ス立派ナ人トナッテ孝行セネバイケマセン

体ヲ充分鍛エテ心身共ニ健全ナルベシ

昭和二十年三月九日 父ヨリ

芳則殿

親愛ナル満智子

オ父サンハ大東

亜戦争ノ勝利ノ為昭和二十年ノ春特別

攻撃隊第二十三振武隊長トシテ日本

男子ノ最大ノ譽ヲ得テ立派ナ戦果ノト

ニ散リマス

オ父サンハ姿コソ見エナイケレド護

国ノ靈トナッテ何時マデモ何時マデモ

生キテ居リマス

満智子モ智子モ克クオ母サンノ謂イ

付ヲ守ッテ立派ナ人トナリナサイ 弟

ノ芳則ヲ援ケテ軍人ノ遺族トシテ立派

ニ成人シテ下サイ

オ母サンハオ前達ノ養育ノ為 言葉

ニ云イ表セナイ非常ナ苦勞ヲシテ来タ

大キクナッタナラ此ノ御恩ヲ忘レズ 必ズ孝行シテオ母サンヲ楽ニシテ差上

ゲナケレバイケマセン

オ父サン オ前達ノ成長ヲ見守ッテ

オリマス 良ク勉強シテ立派ナ人トナ

リナサイ病氣ニナラナイ様体ヲ丈夫ニ

ナサイ

昭和二十年三月九日 父ヨリ

満智子殿

三月二十五日、父は壬生から桶川の自宅に帰って来た。最後の別れのためである。

三人の子供の一人一人に声をかけ、抱きしめた。姉と私は、ひさしぶりの父に大はしゃぎで喜んだ。父はいつまで

も芳則を抱き上げ、「頼んだぞ、芳則は男の子だから、大きくなったらお母さんを父さんの代わりに守ってあげるんだよ。お母さんの言うことを聞いて、わかるよね」と芳則に話しかけ、「父さんと芳則の約束だよ」と、まだ何もわからない赤ん坊に話しかけていたという。

母は、こう語った。「この非常時、お国のためなら当然のことです。三人の子供の成長を楽しみに生きていきます。しっかりと育てていきます。心置きなく、出発してください」

しかし、最後に玄関を出るとき、母は感極まって、声にはならなかったが、「三人の子供を残して行かないで」と心の中で言った。

父にはその声は聞こえなかった。はつと気を取り直し、母は「武運をお祈りします」と言った。

「それでは任務に邁進いたします」それが父の最後の言葉だった。

【父より母へのはがき（昭和二十年三月二十七日）】

（あて名）

埼玉県北足立郡桶川町八二四

伍井園子殿

（差出人）

栃木県下都賀郡壬生町  
壬生飛行部隊伍井隊 伍井芳夫  
前略

計らずも最後の御別れが出来てうれしく思います。

子供達も至極元気で何よりです。芳則もビックリする程大きくなって頼しく思いました。

御手紙何よりもうれしく力強く感じました。ありがとうございます。

任務に笑って邁進出来ます。何卒お体大切に元気で暮して下さい。後は宜しく願います。

皆様宜しく。彼方に行っても暇があつたら書きます。では御気嫌よう。左様なら

出撃——父からの最後の手紙  
昭和二十年三月二十七日、午前八時三十分。

栃木県の壬生飛行場を発ち、北埼玉の上空を飛び、母と肉親に翼を振り、別れを告げた。

前もって通過する時刻を知らされていたので、近所の人たちと坂部家（歌子叔母さんの一家）の人々が外に出て待っていると、父の特攻機は上空に飛来し、二回旋回し、翼を振りながら西の空に機影は消えていった。

母は芳則をおんぶして、長女の満智子を前に立たせ、私の手をしっかりとらなぎ、片方の手を大きく振って、父の機影が消えても手を振っていた。

飛び立ってすぐ、一機がエンジン不調で古河（茨城）に不時着。三十分程の修理で本隊に追いついた。しばらくして、また一機が、静岡あたりでエンジン故障により、川原に不時着。また

一機、故障により不時着したが、それでもなんとか十機、加古川、大刀洗を経て、前線基地の知覧に入った。

【父より母へのはがき（昭和二十年三月二十七日）】

（あて名）  
埼玉県北足立郡桶川町八二四

伍井園子殿

（差出人）

福岡県大刀洗

伍井隊

伍井芳夫

前略

無事九州に到着しました。

至極元氣なり。

お体大切に子供達を頼みます。

任務に邁進致します。

三月二十七日 不

隊員は、宿舎の三角兵舎に入った。

父が出撃の前日に書きのこした色紙。  
昭和二十年（一九四五）三月三十一日。

人世の総決算  
何謂ふこと無し  
伍井大尉

隊長の父と隊員十名である。そして、追って三十一日に、全員そろった。三十一日は身のまわりの整理や遺稿の用意に追われ、父は、「人世の総決算何も謂うこと無し」と色紙に書き、さすがは違うと隊員たちを感心させた。岡本准尉は、手持ちの細かい金を「何か食いたいのでも買ってくれ」と整備兵に渡した。

三月三十一日、出撃命令を受領。

四月一日、午前三時に出発。出撃は伍井隊長のほか岡本、金子准尉、大橋、藤野曹長、清水軍曹のベテラン級六人と決定。沖繩・慶良間列島南側付近、夜間飛行のうえに、荒天が予想された。清水機が直前になってエンジン不調。五機が暗夜の知覧飛行場を出撃した。

四月三日の朝、母はラジオの戦況ニュースに耳を傾けていた。毎日、父の隊の

名前がいつ流されるかとラジオの前で待っていたのだ。

「四月一日早朝、手に桜の花を持ち、第二十三振武隊特攻隊長伍井大尉、以下何名と出撃す」と告げていた。そして、沖縄海域において敵艦船に突入したと、ニュースは繰り返された。

もう夫は帰らない。手を振って見送ってから、まだ何日もたたない。そう思ったとき、母は、軍人の妻として張りつめていた緊張感が一度に緩み、涙が止めどもなく流れ落ちるのを抑えることができなかった。夫から「軍人の妻とは」と教えられてはいたが、ついにここまで来てしまった。

その二日後、父からの手紙が届いた。出発前にしたためたはがきが、日ならずして配達された。父との最後の別れが、母の脳裏に焼きついた。そしてあらたに涙があふれた。

【父より母へのはがき(昭和二十年三月二十八日。点検済印三か所。四月五日、母のもとに届く)】

(あて名)  
埼玉県北足立郡桶川町八二四  
伍井園子殿  
(差出人)  
鹿児島県知覧町

知覧飛行部隊 伍井隊

伍井大尉

本二十八日最前線に来た。

至極元氣なり。思い切ってやるぞ。後をしっかり頼む。子供を丈夫に育ててくれ。大いに頑張ってくれ。体に注意せよ。皆に宜しく。

金不要に付、送る。

三月二十八日夜 伍井芳夫

園子殿

私はこの本の寄贈を受け次のような返事を差し上げた。  
御遺族の表情に胸迫るのを覚えます。私の手元にレイテ空挺作戦で散った挺進第三聯隊の人達の、妻が詠んだ歌が残っています。貴女の母君の御心情もそのようなものがあつてでしょう。

以下階級は出撃時のもの  
中野光義少尉妻中野知枝  
迎え火を焚けばとと様飛行機に乗ってくるかと吾子は問うなり

年たりて残り香もなし土用干し  
天川忠雄曹長妻斎藤真理子  
さらばとて夫の握れるたくましましき  
み手のぬくもり今も残れる

我が心うつろなるとき在りし日の

夫を偲びてころなごめり  
梅野九中尉妻梅野チヨ子  
……その頃二才だった長女の祥子が今年の四月、中学の修学旅行で日向の旅立ちました。  
亡き夫と春の一日目揃りし  
日向の海辺吾子の旅行く

夫を偲びてころなごめり

梅野九中尉妻梅野チヨ子

……その頃二才だった長女の祥子が今年の四月、中学の修学旅行で日向の旅立ちました。

亡き夫と春の一日目揃りし

日向の海辺吾子の旅行く

大学まで出してやらむと子には

我が身思へり弱き我が身を

父在さねば動くあれよと

子を諭し

おのを諭す淋しくも

あるか

(以上は私の出した返信)

引用した挺進第三聯隊遺族

の歌は、同聯隊生残りの中村

軍医が昭和三十二年に出した

ガリ版刷りの小冊子に載って

いたもので、私は同聯隊にい

たわけではないので、これ等

の人々と面識はないが、この

人達今はどうしておられるか

の思いに駆られる。中村軍医

も今は亡い。

臼田智子さんの著書は父親

である伍井芳夫大尉(二階級

特進で中佐)の手紙等随所に引用し、生前の面影は記憶なくとも実の父に對する綿々たる情が紙面に溢れていて、読者の胸奥に迫るものがある。特攻隊長だった武人の覚悟と、残された遺族の心情が余すところなく表れているので、心ある人の講読をお奨めする

「特攻隊長 伍井芳夫」  
発行所 中央公論事業出版  
定価 一七一四円十税

第23振武隊

階級	氏名	出身別	生年	戦死日
大尉	伍井芳夫	少候	20	20.4.1
准尉	金子竜雄	昭	11	20.4.1
曹長	大橋治男	昭	13	20.4.1
曹長	藤野正行	少飛	6	20.4.1
少尉	前田 啓	特操	1	20.4.3
少尉	塩島清一	特操	1	20.4.3
少尉	柴本勝己	特操	1	20.4.3
軍曹	豊崎儀治	昭	14	20.4.3
軍曹	清水保三	昭	16	20.4.3



# 名古屋飛行学校の思い出(続)

大日本青年航空団  
名古屋飛行学校依託操縦学生  
畠山 卓次

## 本地ヶ原・「白日の悪夢」

昭和十三年四月二十九日は天長節の日でした。古沢、松本の両君と共に、日暮れて、外出先の守山の町から、小幡の学生寮まで歩いて帰って来た。

陽はとっぷりと暮れて、小幡ヶ原の松林の中の細い道に差し掛かった頃は、一寸先も分からぬ程の真暗闇で、乾ききった道だけが、僅かに白くぼんやりと、浮き上がって見える程度であった。春とは言え、背中からぞみつく様な、夜気だったが、古沢君を中にして、右に小生、左に松本君と三人並んで、殊更に大声で語り合いながら歩いた。

暗闇の林の中は、何と無く不気味なもので、黙って歩くと、足音だけが、辺りに響く様に聞こえて来る。

校門まであと五百メートル位に来た時だった。足元からポツとした淡い光が出た。光は出ただけで直ぐ消えたが、それは淡青色の、なんとも言い様の無い、気味の悪い光であった。

「おいっ！なんだ！」古沢！お

前の足元から火がでだぞ」と、一瞬三人共に立ち止まってしまった。

「何がー」とご本人の古沢君一向に気付かぬらしい。松元君は右に、小生は左に、ポツとした光るものを見た様な気がするが……

守山の町で三人共に、靴の修理をしたので、その時打って貰った鋏が、小石にでも当たって、火花が出たのであろうか？。三人共にその場にかがみこんで、手で路面を撫でる様にして、何か無いかと探してみたが、何も有る筈も無い。……

「おいっ！人魂だぞっ！」と、松本君が急に大声をあげた。

暗闇の林の中にその声が響いて、急にぞみぞみっと寒気がして、三人同時に駆け出していた。

「人魂人魂が出たぞう」と、五、六百メートルを一気に走って宿舎に飛び込んだ。

「おおいっ、人魂が出たぞう」

「古沢の足元から人魂が出たぞう」、ハアハア息を弾ませながら、先に帰って、将棋など差していた連中の中に、駆け

込んだ。そうして、ひとしきりは、その説明に大賑わいであった。

中には、人魂見物に出掛けて来ようか、と言いつつまで出て来た。

その様な事があった次の日から、誰れ言うとなく「おい古沢元気が無いぞ、魂の抜け様な顔をして」「古沢の奴、魂が抜けてしまったからなあ、元気が出ないのも無理ないよ」と、何かにつけて、からかいだした。

面白半分、冗談半分に言っておったのだが、それから暫く経った頃、当の古沢君が「俺一度家に帰って来たいなあ、なんだか本当に魂が抜けてしまった様な気がするよ」等と、言い出し始めた。さあ大変だ。何時のまにか暗示の様なものに、掛かってしまったらしい。

今更、「冗談言うな、魂が抜けてたまるか！」と慰めごとを、言っただけは見始まらない。飛んでもないことになっってしまった。

以後古沢君の前での魂談義は冗談にも禁物、と申し合わせをしたのだが、本人は益々憂鬱になるばかりであった。そうこうして居る内に、五月も瞬く間に過ぎ、あの松林の中で人魂をみると言い出してから、丁度一ヶ月経った六月一日でした。

この日、本地ヶ原の上空は、晴れた空に雲一つ無く、絶好の日和でした。

例の様に池の端にピストを構え、サルムソンでの空中操作を、地上から見守っていた。

今日の科目は、単独空中操作、高度一〇〇〇米にて、左右百八十度旋回、五回宛。

太陽の光が燦々と降り注ぐ六月の大空は、キラキラと眩く、銀色の機体はともすると、大空に溶け込んで、見失いがちになる。

空中操作の空域は飛行場を中心に四つに分けて、各班共に、「空中操作が始まったら知らせよ」との教官の号令で、次の番を待つまで、地上に残った者は、自分等の飛行機を見失うまいと、離陸時から視線を放さずに、懸命に追わなければならない。

その間教官は、搭乗を終わって帰った学生を前にして、左手に飛行機の模倣型を持ち、右手は操縦桿を握った格好で、操舵の説明をしている。

「左旋回では、機体が左四十五度傾いた時から舵の効きが反対になるから、操縦桿を手前に引いてくる、右足で方向舵を踏み応えて、機首の下がるのを止めると共に、内滑りに気をつける」と、体まで傾け足を踏ん張り乍らの講習に余念がない。

「教官どの空中操作がはじまりました」「よしっ」と説明を終えた教官も、

眩しように小手をかざして空を見あげた。

そして、「少々深すぎるぞ」「引きがたらん、引けっ、引けっ！」と独り力んでいる。

その時だった、「あ、あっ！」と思わず皆立ち上がったしまった。旋回中の飛行機が、くるっと機首を下げたと同時に、地上めがけて、くるっくるっ

と回転始めた。雖揉みだ！と思う間もなく、回り乍ら引き起こそうとしているのか、ベコッ、ベコッと二回程、機首を上げ様とするかに見えたが、それと同時に、何か空中に、バツと飛び散った。

「あ、あっ！」と、出掛かった声も、一瞬間に支えてしまった。……空中分解だ！。

機体は急速に回転を速めると共に、地上目掛けて真逆様に。……突っ込んで行った。

唸る様な、絶望的とも聞こえる爆音を残して、丘の向うへ消えて行った。

呆然として立ち尽くした皆の眼に、ヒラリ・ヒラリと舞い乍ら、機体のあとを追うように、落下してゆく銀色の片翼、だけが残った。

「誰だ！」「古沢学生です」と、吾に帰った様に期せずして皆が駆け出した。丘の向う目指して。

駆け乍ら、古沢よ、雖揉みに入ったとき、どうしてエンジンを絞らなかつたのか。そして、手足を、操縦桿とフックから放して、機体の回転の緩くなるのを待たなかつたのか、どうして無理に引き起こそうとしたのか……。

と、混乱した頭の中で、ボンヤリと考へ乍ら、叫び乍ら、息せき切って走り続けた。

古沢が死んだ、古沢の魂は本当に抜けてしまったのか、自分までが急に気が抜けた様な気持ちになり、よろよろしながらも、只、只走った。

走る途中で騎兵の団が追い越していった。演習に来ていた騎三の一隊が、事故を聞き付けて、駆けつけて、くれているのであろう。

丘の向こうの麦畑には、附近の畑で働いていたお百姓さんや、近くの民家から駆け付けた人達が、遠巻きに、人の輪を作って立って居た。

吾々も駆けつけて見たものの、手の着けようが無かった。

機体は勿論地中深く入り込んでいた。最後までエンジンが回っていたか、プロペラの回転で大きく抉られた地面は、大きな窪みを作り、土中深く埋まったエンジンが、その上にジュラルミン

の隔壁が。その上に、見えてはいないが。人間が、またその上にガソリント

ンクと、折れまがった胴体と。一番上に尾翼が乗っていた。

空中で飛んだ片翼は、二百米程度離れた麦畑に落ちていた。これが空飛ぶ飛行機の残骸かと、考へれば感慨無量だった。まるで破れて落ちた瓶の椽であった。

遺体を担架に乗せてトラックまで運ぶ時に、手伝っていた機関学生の、河村君と宮島君が、腹部が破れて、腸がこぼれそうになったのを、手の平で押さえて運んだ。と誰かが言っていたが、その河村君が、跡片付けの最中に、膝小僧の骨とか言っていて、白い骨の破片を拾って来た。

半長の飛行靴を破って、折れた向う脛の骨が突き出していた。とも言った。余にも無惨な遺体に、「君ら操縦学生は近寄るな」との教官の言葉に、只々呆然と見守るばかりであった。

最後に丸太が組まれ、地中からエンジンが引く張り出された。

跡片付けを終り。棒の様になった足を、力なく引き摺り乍ら、暗くなった道を、学校に辿りついた時は、何時頃になっていだらうか。

「速く夕食を済ませて、守山のお寺へ、お通夜にゆくように」と、急ぎ立てられた。

遺体は既に医者の手で縫合され、繻帯に包まれて、白木の棺に納めて、学習室に安置されていた。

食堂から暗い校庭に出た時だった。「おいっ！人魂がっ！」と、岩田君が言う、僕等には見えなかったが、確かに見たと、先に外に出ていた四、五人も騒いでいる。校舎の屋根から格納庫の方へ飛んだと言う。

「何処に？・・・」と、暗い空を見上げて居ると、急にまた寒気がしだした。

魂が二つも三つも有って堪るものか！、と言ったものの、古沢君の人魂も、空中分解した自分の飛行機の、置いてある格納庫へ、飛んだのであろうか？。

格納庫に怪談はつきものの様だ。今日墜ちた古沢君のサルムソンの残骸も、おそらくあの格納庫に運ばれたのであるか。格納庫の隅には既に、卒業を前にした通信省の委託学生が、滋賀県の堅田で、猛吹雪きに遭い墜落した時の、機体の残骸が帰っていた。窓辺に点々と滴る血の跡は、その残骸からの噂話に、交々見に行つたことが有ったが。結局は窓辺に止まったガラスが、窓ガラスに写つた自分の姿に怯え、突っ突いても消えない姿に、血を流してまで、突き続けたらしかった。

そろそろお寺の方へ出掛ける様に、との週番学生の声に、三々五々連れ立っ

て校門を出て、暗闇の中を瀬戸街道に出た。

今夜も街道は白く埃っぽかったが、ここまで出ると、足元がほの明るく見える。

松林の中の道を、黙々と、どの位歩いたであろうか、後ろから自動車が来たので道端の方へ避けた。

自動車は土埃りを巻き上げて、二三百米通り過ぎてから停車した。霊柩車だった。と、後ろのドアが開いて、「おい、一寸来てくれ」と呼んで居る。近付いて見ると学生長の飯沼さんだ。

「おい、その二人、これに乗ってくれ、乗ってこれを押さえいってくれ」と言われる。

その二人と言われて、改めて相手の顔を見直したが、松本君と小生の二人だけだった。

何時の間にか、皆・先に行ったのか、附近には僕等のほかには誰も居なかった。豆電球の暗い車内に入った。そして屈み込んで寝棺を押さえた。

「棺の蓋がバタバタして仕様が無かったのだ」と飯沼さんが、やれ・やれと言った表情で言う。

彼も独りでは寂しかったのかも知れない。

此のお棺の中には、占沢君が居るの

だ。本当に魂の抜け去った占沢君が居るのだ。と思うと、急に涙が込み上げてきて、棺を押さえて居る手の甲に、零れ落ちた。

一ヶ月前、人玉を見たときと騒いだその松林の中の、同じ場所、仲の良い三人連れの人々が、今日この世から消えてゆき、残りの二人が偶然にも呼び止められて、その霊柩車と一緒に乗せられるとは、……如何に神経の太い二人でも、因縁の深さに少々気味が悪くなつた。

淋しがりやの古沢君が。仲よしだった二人に、「そこまででも良いから一緒に来てくれ」と頼んでいるような気がして、可愛そうになり、お棺の蓋を撫でてやつたが、噴き出す涙は、止まらなかった。

お通夜のあったのは、守山のどの辺りか、また寺の名も思い出せぬが、寺と言うよりは小さなお堂と、言った感じのする処だった気がする。

形式通りの棺前経をあげて貰った後、横になっても良い、と言われたので、皆その場にごろりと、思い思いの姿勢で眠り始めた。昼間からの疲れで、何も考えられない程に疲れて居た。地の底へでも吸い込まれる様な、眠さであった。

どのくらいの間、眠ったであろうか。

何か？人の囁く様な、ざわつく感じがして、脇腹を突つ突かれ、ハッと目が覚めた。と言うよ、眼を擦って辺りを見回した。

頭上の裸電球と、祭壇一杯に立てられたお灯明の光が眩しかった。

「あれを、あれ」と、耳もとで囁く声に、祭壇の方を見直した。お灯明の何本かが消えかかり、それが又ゆらゆらと揺れ輝いて居た。

見ると、その灯明と灯明の間から、瘦せ細った手が出て、ぶるぶると震えながら、消えた蠟燭を掴もうとして居る。祭壇の後ろに白衣の坊主頭が見える。……幽霊！。そんな感じして、その薄気味悪さと言ったらなかった。

先程から、誰かが気付いて。幽霊では？、と囁き合って居たらしい。尚良く見ると、今度はぶるぶる震える手に、灯の付いた一本のローソクが握られて居て、その先の灯明台に新しく替えられたローソクがあるのだが、手の震えがひどく、なかなか新しく立てたローソクに、灯が移らぬのだった。

夜中に堂守りの和尚が、ローソクの灯の点け替えに来たのだが、此の和尚さん、中風を病んで居たらしく、灯明台の間から震える手だけ出して、消えたローソクを掴もうとして居るのだが、

招く様な手の格好と、未だ死んだとは

思えぬ、仲間の通夜に、白衣と坊主頭とあっては、舞台装置満点の幽霊が、出来上がったってしまったらしい。

飛んだ幽霊騒動でした。

昭和十三年六月一日、名古屋飛行学校在校中の悲しい出来事でした。

「霹靂」

—— 本地ヶ原上空、古沢雅二郎君

空中分解にて死す

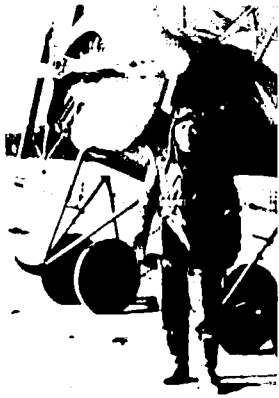
晴天に霹靂おこりわが友の翼飛び散り

大空の銀の砂子のまぶしきに友の翼が 散り墜ちてゆく



大日本青年航空団委任操縦学生

アンリオン練習機



古沢雅二郎君



当時の服装 右端が筆者

## 禪語に接し 特攻隊員の心情を偲ぶ②

【両頭俱に截断し一剣天に倚つて寒し】

(槐安国語)

楠木正成が湊川に討死する前、出陣にあたり日頭帰依していた楚俊禅師のもとに行き教を乞うた。

正成は問いかけた「生死交謝の時如何」それに対し禅師は「両頭俱に截断し一剣天に倚つて寒し」と答えた。

正成は未だ合点がいかなかったのか、「畢竟如何」と問いつめた。禅師は、「喝！」と言発しただけだった。

後世の作り話かもしれないが、蘊畜ある話である。

両頭とは生と死である。生死を相対的に考えていると迷いは去らない。君国の為死ぬと一旦きめたらそれに徹すれば迷うことはない。楚俊禅師の教えはここにあった。

ところでこの禪語を念頭に特攻隊員の心情を偲んでみよう。

緒方裏海軍中尉は関西大学出身、第13期飛行予備学生となり任官、第1神雷部隊桜花隊員となって一式陸攻に搭乗、20年3月21日鹿屋発進、九州南方洋上で戦死。

清がすがしい花の盛りにさきかけて

玉と砕けむ丈夫我は

死するともなほ死するとも我が魂よ

永久にとどまり御国をまもらせ

これは出撃三十分前に鉛筆で海軍手帳に走書きした辞世である。

緒方中尉は兄徹と共に国史学の泰斗平泉澄先生の門下に入り、連綿脈々として皇国を護持してきた我が青史の奥義に心酔し、学徒動員で海軍に入り、志願して桜花(ロケット推進特攻機)の搭乗員となった。

兄も行け我も果てなむ君の辺に

悉々果てむ我が家の風

という和歌ものこしている、兄徹もまた第12期飛行予備学生で海軍中尉、比島ミンドロ島で戦死している。

宮内栄少尉候補生は同志社大学より飛行予備学生となり、第三章雑隊に属し、20年4月28日99艦爆に搭乗第二国分発進、沖繩近海で散華

遺稿抜粹

十月一日、ついに翹望の学生12月一斉の入営の発表こそは発せられた。正に晴天の霹靂であった。この刹那、自分の悩みの雲は忽然として霧消してしまった。

そうだ、日本に生を享けて、大君の御為にすべてを捧げ奉る、何んと歡喜すべきことであろう。ここには何んの

批判もない。何んの疑念もない。ああ

自己の確立こそはこの一点に集中して

始めて出来るのである。自己の信ずる

道は実にここにあったのだ。人は何と言ってもいい。たとえ非難してもいい。

自分は断乎としてこの信念、この自覚の下にただ一意絶対尊皇の道に挺身する決意である。

ここに思い至った時、自分には何の悩みもなくなった。自分の境地は忽然として、煌々たる明るみへと出られたのである。

ああ、こうしていると幾多勤皇の志士の脈々たる血潮が、我が五体に躍動して来るのを禁じ得ない。もう生とか死とか考える必要を感じなくなった。

今の自分には生もない、死もない。坦々たる心境に到達し得た喜びで一杯だ。遠く万葉の歌人の吐露した赤誠も、防人がその出陣に当たって憂憤、その胸底よりほどばし出たあの歌も、さらに

また維新の志士が生死を度外視して皇事に尽くした精神も、電光のごとくわが琴線を激しく揺り動かして、神秘的音楽を奏でるのである。(以下略)

### 安井少尉の御遺族判明す

安井昭一少尉（少飛15期、74振武隊、昭和20年4月7日 沖縄、中城湾で戦死）が、出撃時に身に付けていた日章旗の顛末に関しては、本誌55・56号で報告したが、御遺族不明の俣少尉が出撃した萬世飛行場跡に建てられた、加世田市平和祈念館に保管展示されることになった。

協会は御遺族の判明を願って、読・朝・毎・産経の東京本社社会部長宛に資料を提供して、全国版ニュースとして報道することを要請した（6月30日）。数日後読売の京都総局から電話取材が入ったが、直ぐには記事化されなかった。

丁度一ヶ月経った7月29日の夕方、大津市在住の梶谷信男氏（68）から電話で、2歳下の弟の松男が安井家の養子に入り（少尉の従弟）、現在は吹田市に住んでいる旨の連絡が入った。同夜安井松男氏とも連絡が取れた。御商人共読売の購読者ではなかったが、記事の反応は早かった。

安井家は二女一男、長姉サタ様は健在で京都・山科に在住、次女ワキ様は吹田に在住だが、目下山科の病院に入院中で、経過必ずしも良好ならずということであった。同姓同名で別人ということもあり得るので、少尉の写真を見

たいとのこと、同期生の岡本久吉氏に連絡して、55号収載の写真を至急送る様に依頼して、慌しい一夜は終わった。

加世田平和記念館にバトンタッチして、8月14日15時から同所で返還式が執り行われる運びになった。館の前に立つ、萬世特攻隊慰霊碑「よろづよに」の前で行われる予定が、雨天で祈念館一階、零式三座水上偵察機展示広間に式場は変更された。

吉峰良二萬世特攻隊慰霊碑奉賛会長から、日章旗が安井松男氏に手渡されたが、直ちに松男氏からは、日章旗は祈念館にお納めしたいと発言があり、川野信男加世田市長がそれを受取って式は終了した。

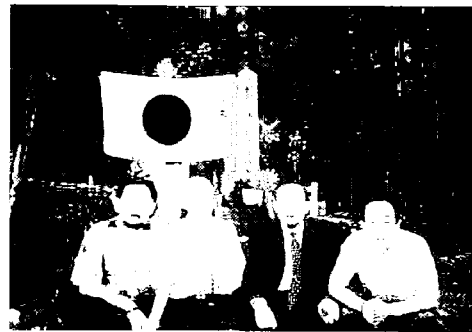
この日章旗は末永く祈念館の一角に飾られて、多くの参観者に「戦争と平和」を問い続けて行くことであろう。松男氏が、実父の梶谷藤次郎氏から聞いたことによると、松男氏の養子縁組は安井少尉が提案されたという。松男氏の入籍は昭和20年3月15日。少尉はそのことを知って、思い遣すことは無いと、莞爾として萬世基地を発進されたのであろう。今更乍らその崇高な行動には、唯々頭が下る許りである。

尚日章旗は暫時松男氏が携行され、早速京都府京北町にある少尉の墓前に捧げられた。58年振りのこと、在天の

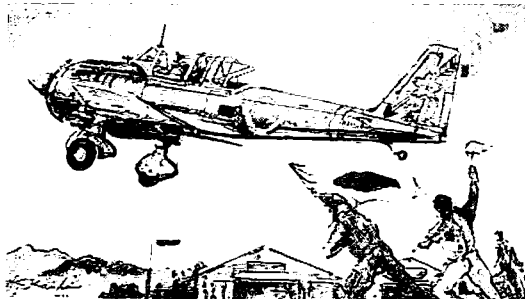
安井少尉の御遺物は、どのような感慨を抱かれたのであろうか。



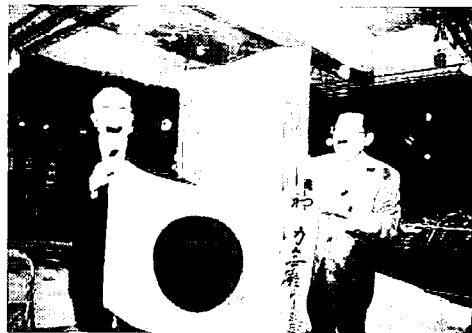
吉峰会長から安井松男氏へ



日章旗を手をしているのが、梶谷信男氏、日章旗に隠れた安井少尉の墓の下部が見える。墓前左端安井松男氏、その隣は少尉の友人、右二人は梶谷信男氏の兄上（京都府北桑田郡京北町）



99號、尾翼のマークは違うが機種は同じ  
少飛会海法秀一画



安井松男氏から川野加世田市長へ

## 「第一御楯特別攻撃の全記録」抜

の「サイパン特別銃撃隊」零戦13機は、館山基地は感じられない。しかし、小隊長の村中尉までが風防ガラスに頭をつけ、振り返って私を見つめている。しまった。私の愛機に何かあるな、と直感的に思っただけだが、昨夜来、整備科員が不眠不休で整備した機である。エンジンその他すべて順調そのものであり、どこにも異常はないはずだと自分に言い聞かせる。

増槽タンクに何かトラブルがあったのだろう。致し方ない、基地に帰ろう。一生一度の大事のこの時に、どうしてこんな事になったのだろう。泣く泣く館山基地に引き返す。

原因は編隊集合のとき、私自身の荒っぽい操作によるものか、増槽タンクがちぎれ飛んでいたのだ。出発時に見送ってくれた歴戦の先任搭乗員は、「ムリするな。いつでも死ぬ」と慰めてくれる。

しかし、私は泣いても泣き切れなかった。ついに私は、脱落機第1号になったのだ。

—以上—

我が協会の会員西村友雄さんは、既に首題の本を出しておられたが、このたび増補訂正し改訂版を作られた。この部隊のことは会報29号と30に掲載し更にビデオも作り、そのナレーションの全文は35号に載せた。今回改訂版の寄贈を受けたので、若干重複する部分があるが、一連の経過のうちで最も感銘深い箇所を転載させてもらう。

なお西村さんは当時に上飛兵曹で誘導に任ずる彩雲の電信員としての攻撃に参加している。

### 第4部

#### サイパン特別銃撃作戦発動

#### 第1章 サイパン特別銃撃隊館山基地を発進

##### 山基地を発進

サイパン特別銃撃隊が館山基地を出撃した時の状況は滝沢謙司氏の手記に詳しく語られているので、その中から関係ある部分を、ほぼそのまま抜粋記述する。

昭和19年11月26日午前8時、大村謙次中尉の指揮する第22空戦闘隊317飛行隊

既に上空には、木更津基地を発進した誘導機1式陸攻が旋回中である。同機には、本作戦の指揮をとる3航艦長官・寺岡謙平中尉ほか参謀スタッフが搭乗され、零戦隊の離陸を待っている。長官自らが本作戦を指揮とは、その並々ならぬ決意のほどが偲ばれた。

私(滝沢氏)は第1小隊、大村中尉の5番機である。編隊では3番機の明城飛長の後方につく。俗にいう「鴨番機」(編隊の中で敵戦闘機に最も狙われ易い、一番外側にいる機をいう)である。攻撃散開時には、松下兵曹の2番機と4番機の新堀飛長の2機が別小隊となり、私は大村小隊長の3番機に編隊を組み直して、突撃することになった。

この日8時5分、私たち彩雲隊も硫黄島に向けて木更津基地を発進、11時13分、第1飛行場に無事到着した。その後、私たちは前回の時と同じく元山地区にあった水交社(本土に避難疎開した旧島民の民家を接収したもので、硫黄島唯一という井戸があった。但し、その水は生では飲めなかった)へ向かう。サイパン特別銃撃隊はその後暫くして、硫黄島駐在戦闘機隊用の第2飛行場に着陸しようだった。その間、水交社で休憩していた私達は、迎えに来たオート3輪で3航艦司令部主催の作戦会議が開かれる場所に向かった。そこは硫黄島北地区にある27航戦司令

さて、全機が離陸して1番機を追う。私たち列機は、自分で機体の見えなところ、即ち尾翼や胴体後方、翼下などを上になり下になりして見せ合い、異常がないことを確認し合う。

薄い雲間の遙か彼方の上空に、長官機と零戦の編隊が旋回している。私を待っているのだ。なんとということだ。どうしてこんなことになったのか。

やがて全機が集合して、長官機を追う。上昇中から4番機の新堀飛長がしきりに翼を振り、何やらこちらに合図している。だが私の愛機は順調で異常

早く編隊に追いつかねばと上昇に移るが、雲が邪魔で突っ切れない。ようやく雲上に出たときは、既に攻撃隊の編隊は雲間に消えて見えなくなっていた。もはや編隊には追いつけない。

部の、地下深く作られた鉄筋コンクリート造りの強固なものだったが、その時の綿密な打ち合わせの概略は今でもほぼ記憶している。

私はこの作戦後39年間、零戦隊は作戦計画の最初から12機だったとばかり思い込んでいた。その後、滝沢氏が昭和58年秋、雑誌「丸」の「零戦とわたし」欄に投稿した手記で事の真相を知り、滝沢氏と連絡を取るようになった。そしてその後に、滝沢氏が再び「丸」に発表した詳細に亘る貴重な手記を、本稿で引用させて頂いた次第である。

### 第2章 硫黄島における出撃前日の作戦会議

19年11月26日、サイパン特別銃撃隊と我々彩雲隊が参加して、27航戦作戦室で行われた作戦行動の打ち合わせは、3航艦航空参謀三沢裕少佐が指導した綿密なものだったが、その内容は、おおよそ次の通りであった。

①零戦隊は、27日8時硫黄島を発進後、マリアナ諸島北部のアグリガン島まで彩雲1番機の誘導を受け、そこから分離行動に移れ。本作戦成否の鍵は一にかかって奇襲にあり、以後は米軍の電探を避けるため（アナタハ

ン島には敵電探基地存在の公算大なりと、特に注意されたが実際は無かった）、マリアナ諸島の列島線に沿い、その東方を島の頂上を視認する程度離れ、高度50m以下で南下接敵、アスリート飛行場とテナアン島の飛行場を急襲、在地のB29を銃撃により破壊炎上すべし。攻撃予定時刻は12時10分。

零戦隊は目的地到着後、超低空から一気に高度300m以上に上昇、そこからB29に対する急降下銃撃行動に移り、第一撃で必ず1機の炎上を期し、引き起こして上昇反転、炎上を確認出来なければ同機に更に一撃を加えよ。一撃目で炎上を確認した時は二撃目で次の機を銃撃せよ、だかいずれにせよ第三撃は行ってはならない（計算上、帰途の燃料が不足する）。

第二撃終了後は急ぎ飛行場を退避、不時着地バガン島飛行場へ向かえ。同島には陸海軍約300名が守備し、生還搭乗員は12月中旬潜水艦によって救出する。

②彩雲1番機は零戦隊を誘導し、零戦隊分離後は列島線西方を約80哩（148km）離れて南下、零戦隊の攻撃予定時刻の10分後には高度1万m以上でアスリート飛行場上空に達し、固定

写真機による連続垂直写真を撮影、零戦隊の戦果を確認せよ。偵察コースはテナアン島南端より北上、サイパン島北端に至る両島を縦断するコースとする。

③彩雲2番機はウラカス島付近まで零戦隊の後方を飛行し、以後単独でバ

ガン島に先行、同島部隊が使用する暗号書等を投下後は、1番機同様の要領で戦果偵察行動に移れ。

—以上—

バガン島守備隊は、当初サイパン方面部隊に所属していたが、マリアナ



車座に座ったサイパン特別銃撃隊員に、最後の注意事項を伝える瀬藤満寿三少佐と、その右側に立つ寺岡謙平中尉。その右2人目の、飛行帽を被り左横顔を見せる士官は航空参謀三沢裕少佐。

落後は孤立したまま補給がなく、放置されたような状況に置かれていた。従って暗号書も古いものをそのまま使用していた。先日も「私の所属はどこか？」と問い合わせて来たので「貴隊は硫黄島部隊の所属なり」と返答したという。そこで彩雲2番機がこの機会に、最新

の暗号書・連絡文書を投下する事になったのである。

その作戦会議も終わり、地下壕から外へ出てほっと一息ついている時、居合わせた参謀の一人か、集まっていた零戦隊の特乙1期生達に「バガンまで帰る為には、サイパン上空で5分間位

しか戦闘行動をとれないが、どうするか」と、問いかけた。一瞬の間も置かず「突っ込みます」と異口同音に答えた若い彼らの声は、傍で聞いていた私には終生忘れられない。その答えに、聞いた本人の参謀は無言のまま、何も言えないようだった。

また、広瀬飛曹長は別のグループ（甲飛11期生4名と思われる）が、「銃弾がなくなるまで、銃撃を繰り返す」と話し合っていたのを聞いている。

なお、その後、私たちは第2飛行場の列線に並んだ銃撃隊の零戦を間近で見た。それまで零戦は主翼の20mmと胴体上部の7・7mm各2挺だけと思っていたので、20mm2挺と並んでその外側にも、13mm機銃2挺の銃身をぐっと突き出した零戦52型丙（この他、胴体上部の7・7mm銃2挺の代わりに、13mm銃1挺が装備されていた）の精悍な雄姿が、頼もしい新鋭機のように私の目に映った。その零戦52型丙は胴体の標識・垂直尾翼の横番号等が、主翼・胴体の目の丸を除いて総て消してあった。恐らくその所属がどこか、米軍に知られないようにとの配慮だったと思うが、私には黒い鳥のように異様に感じられた。

秦郁彦氏の文章を引用！

その夜、航空本隊から硫黄島に派遣（1か月交代が原則）されていた森（改姓島田）茂久中尉を大村中尉が訪ねている。二人は海軍兵学校（72期）、飛行学生（41期）、航空を共に歩んできた同期生である。

迎えた森中尉が椅子をすすめると、小柄な大村中尉は行儀よく腰をかけ、淡々とした表情で、

「今度、サイパン攻撃に行くことになった」と告げた。

暫くぶりの出会いなので、江田島や級友の思い出話が出たが、大村中尉はいつもと同じように口数が少なく、却って森中尉の方が興奮していたという。大村中尉は超低空飛行と海上航法を気にしているようだったので、航空図を持ち出した森中尉が燃料計算をやってみると、バガン島まで戻るのはよほど幸運に恵まれないと無理に思えた。

二人とも実戦部隊に配属されているとはいえ、飛行時間は20時間を越えた程度の駆け出しで、長距離の海上飛行にはほとんど経験がなかった。

「貴様、これは特攻じゃないか」と森中尉が色をなすと、大村中尉は

「そうだなあ」と静かに答えたそうである。



サイパン特別銃撃隊員12名と誘導機彩雲隊員6名を前に訓示を終わる第3航空艦隊司令長官寺岡謹平中將

以下大村謙次中尉についての部分は、



級友の端正な表情に、いささかの動揺も気負いも見いだせなかった森中尉は、それ以上語る言葉を見失っていた。「この男は生還する気が全然ないのだ」と感じとったからである。

—以上—

以上のように、零戦隊の掃還計画は一応立てられてはいたが、大村隊長以下12名の全隊員が初めから生還を期していなかった事は明白である。また、3 航艦司令部自体、作戦計画立案当時から、その生還はほとんど不可能と判断していたように思う。

その後、宿舎に帰った我々は1番機機長南嶺少尉を中心に、彩雲隊としての打ち合わせを綿密に行った。即ち、

① 零戦隊誘導中の進撃高度は300mとする。これは敵機と遭遇する場合を考慮すると、たぶん敵機は300mの常用高度を飛んでいるであろう、従って、それよりも高度差200mの優位を飛ばば、敵機と遭遇しても安全であるという考えであった。従って掃還の巡航高度も同様に配慮した。

② 零戦隊誘導中の彩雲の速度は極力零戦隊の巡航速度に合わせねばならないが、これはすべて広瀬飛曹長の手

腕に任せる以外ない。(後記の広瀬飛曹長の手記に詳述)

③ 三沢参謀が指示したアグリガン島よりの南下コースは、列島線より 80 哩(140哩)離れるようにとの事であったが、これを更に安全な距離、90 哩(161哩)とする。

④ 通常は高度1000mとする酸素ボンベの開栓は、高度500mで行う。これは、酸素節約の為に行う処置である(高度1000mの気圧は地上の半分になり、高度1000m以下で開栓しても、酸素は流れ出ない構造だった)。

⑤ 前回のグアム島偵察の時、広瀬飛曹長から「飛行中後方の見張りを担当する西村は、その見張りらしい」の報告の代わりに、5、6分おきにプザーで合図をしろ。その合図はモース符号1個でいい。操縦員は後方の見張りが一番気掛かりである。プザーを鳴らす事で、電信員が居眠りをせずにちゃんと見張りをしている事が分かり、俺は安心して操縦と前方の見張りに専念出来る」と言われた。

その時、広瀬正吾飛曹長は「鳴らすモース符号は自分で決めろ」と言われたので、私は「ハ」、即ち「……」に決めた。今回もこれを実行する事とし、南機長に説明了解を得た。

宿舎の水交社は本土に強制疎開した旧島民の日本家屋の住居を転用したもので、周辺を豊富な樹木に囲まれ、昼間はあちこちから鶯の特長ある囀りが聞こえ、戦場とは思えないほど静かで、心安らぐ雰囲気味わえる場所にあった。

その晩は、

私も進出作戦が2度目であり、興奮する事もなく特に思い出はない。

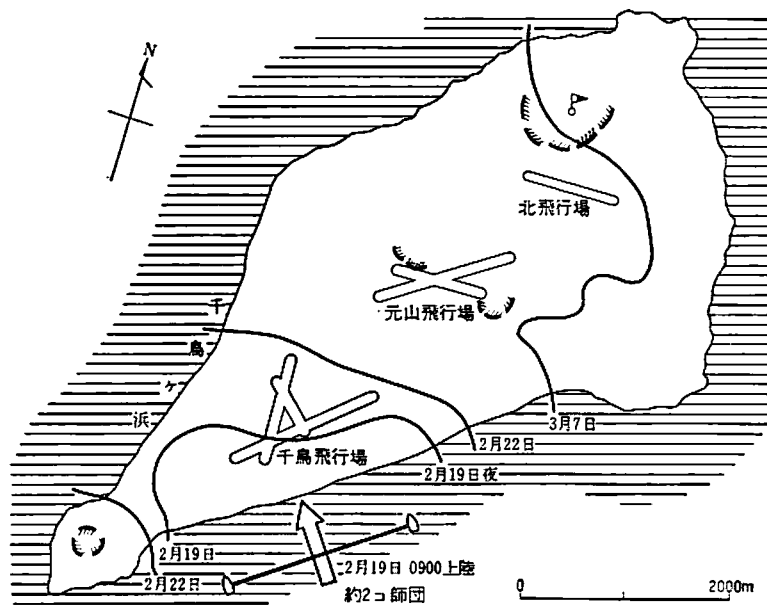
この頃の硫黄島の気候は、日中は本土の初夏くらいで、夜中も毛布一枚あれば十分だった。ただ、毎晩のようにマリアナから飛んでくるB24単機の夜間爆撃は、長時間ウワン、ウワンという特有な爆音が響き、時折落とす爆

弾と共に、神経作戦とはいえ安眠を妨げること夥しいものがあつた。

以下次号

この要図は飛行場の所在を認識する為、編者が入れたもので、敵進攻の線が入っているが当時とは関係ない。

硫黄島飛行場配置



## ハンガリー日本博物館について

田中賢一

スティープン・ドマ・ミコーというハンガリー人が 自国のフユゼシュジャルマトという所に日本博物館を建てたので、特攻隊について展示するものを欲しいという申し出があった。そこで次のような資料を送った。この人の奥さんは日本人で日本における住所は埼玉県の川口市にある。

この絵を拡大コピーして展示することをお勧めする。各絵の説明をするが、その前に特攻隊には次のようなものがあったことを承知しておいてもらいたい。

### 航空特攻

相手が艦船の場合と大型航空機の場合があった。また帰還の見込みがないのに、敵基地の攻撃に出たものもあった。

### 空挺特攻

地上の友軍と合流する見込みがないのを承知のうえで、敵地に降下または着陸して戦闘した。

### 水上特攻

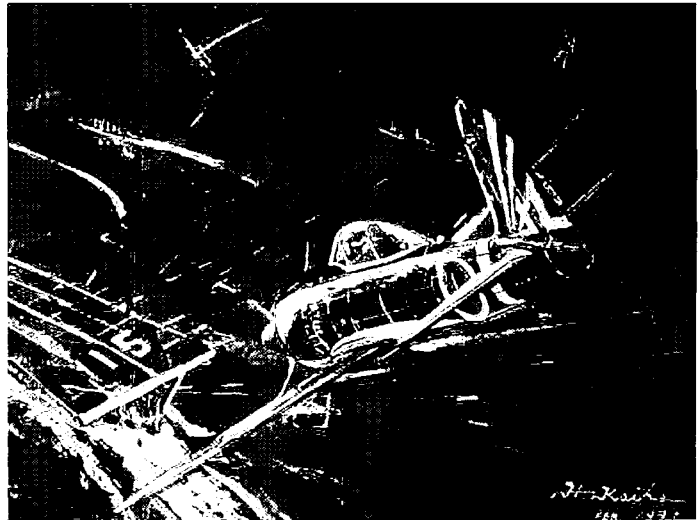
陸海軍ともに小型ボートに爆薬をつけて敵艦に体当たりする部隊を作った。

### 水中特攻

回天と称する人間魚雷や 伏竜という潜水具をつけて敵の予想上陸地点の海底に潜み上を通る敵の舟艇を爆雷で攻撃することも計画した。二人乗りの特殊潜航艇もあり、これは魚雷を発射し帰還出来る筈だったが、実戦では帰還出来たものはなかった。

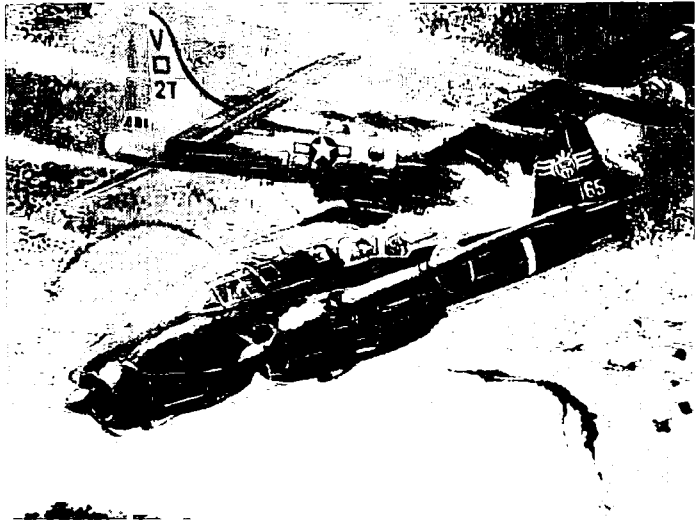
(A)「カミカゼ」の名で有名になった航空特攻は、レイテ作戦の際海軍航空が250キロ爆弾装着の零戦で敵空母に体当たりしたのが始まりで、その部隊を神風と呼んだ。陸軍航空も少し遅れて爆装した爆撃機を繰出してこれに続いた。余談ながら当時日本軍には空軍はなく陸軍と海軍が別々に航空部隊を持っていた。爾来比島作戦、硫黄島作戦、沖縄作戦と航空の主体は特攻となった。対艦船の航空特攻は在来の飛行機を使ったものが主体だったが桜花(おうか)という体当たり専用の飛行機も現れた。これについては後でのべる。

この絵は陸軍の1式戦闘機が敵空母目掛けて突進しているところ。

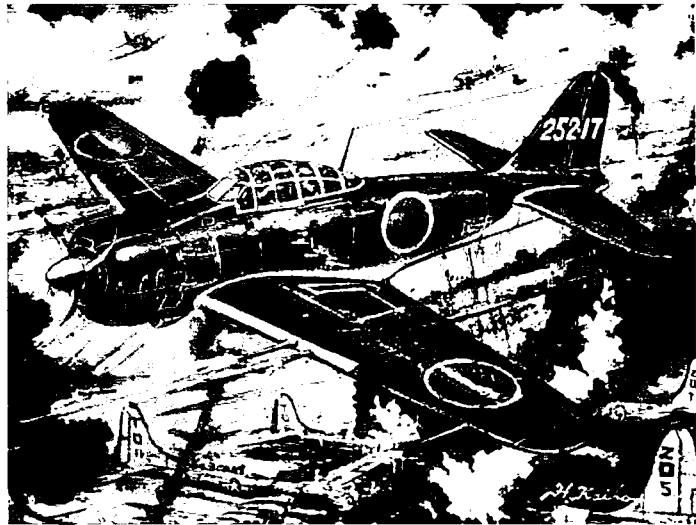


(B) 日本本土空襲に猛威を振るったB-29爆撃機は 高空における飛行性能が優れていて日本の戦闘機ではなかなか撃墜できなかった。そこで戦闘機の装備品を最少にし機体を軽くして、体当り戦法を採ることにした。これによって少なからずB-29を撃墜したが、操縦者の殆どは機と運命をともにした。

この絵は常陸飛行師団の2式複戦が昭和20年(1945)1月27日船橋上空で体当りした場面の想像画。このときB-29は火を發し、暫らく飛行したがやがて墜落した。我が戦闘機も墜落し、2名の搭乗者は戦死した。



(C) B-29の基地はサイパンにあった。ここの飛行場を制圧する為陸海軍とも少数精鋭者による爆撃機で夜間攻撃したが、決定的戦果を挙げることが出来なかった。そこで我が海軍では零戦で飛行場にあるB-29を銃撃することを思い立った。硫黄島を發進し敵基地を攻撃して、帰って来るだけの航続距離がないので、まだ我が守備隊が確保しているバガン島に着陸し潜水艦で救出するという計画だった。零戦12機よりなるこの部隊を後に第1御楯隊と呼んだ。昭和19年(1944)11月27日8時硫黄島を發ち、計画通り地上にある敵機を攻撃したが全機未帰還となった。



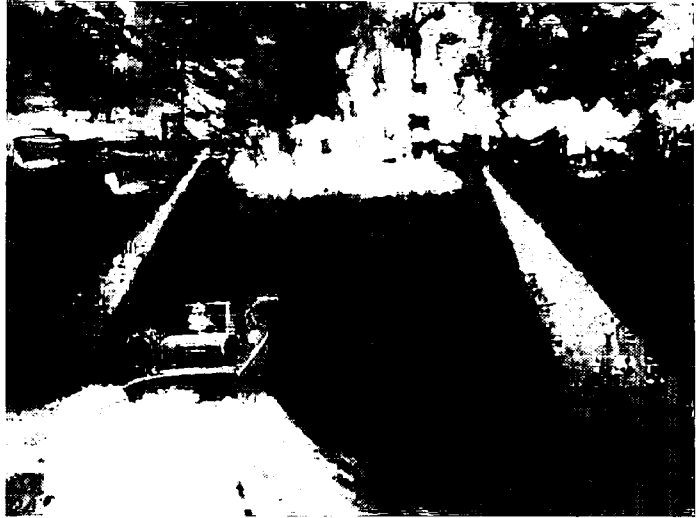
(D) 空挺特攻 空挺作戦は危険の多い作戦ではあったが、友軍と提携できるか撤退出来る見込がある場合は特攻作戦ではない。レイテ空挺作戦でタクロバンやドラグへ向かった部隊は、敵飛行場を制圧した後撤退できないことは、初めから承知のうえ出撃した。沖縄作戦の際の義烈空挺隊も、最後はそこで全滅するのを承知のうえで行った作戦である。このような作戦を空挺特攻と称する。

この絵は昭和20年5月24日義烈空挺隊が沖縄に向かうため熊本の健軍飛行場を發つ前に故郷へ別れを告げている写真があるが、それを画いたものである。



(E) 水上特攻 陸軍のを㊦と呼び(秘匿上連絡艇と称し略してマルレと呼ぶ)、海軍のを「震洋」と呼んだ。両方とも1人乗りか2人乗りである。㊦は後部に爆雷を積み敵艦船に衝突直前にこれを落とし水中爆発をねらったもので勿論生還は期待出来ない。震洋は頭部に爆薬を着けてあって衝突すれば爆発するようになっていた。共に比島戦場と沖縄戦場で活躍した。

この絵は㊦である。

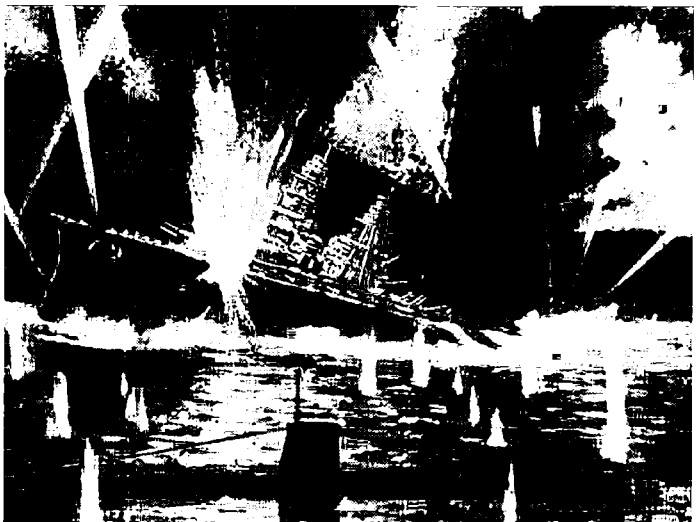


(F) 水中特攻 大型の魚雷の中に人が乗り操縦して敵艦に当る兵器並びにその部隊を「回天」と呼んだ。回天とは時勢をもりかへすという意味である。これによって戦勢を一挙に挽回しようとする期待をもって生まれた戦法だった。潜水艦に4基搭載して出撃した。

この絵は瀬戸内海の基地を出港する場面の写真を基にして画いたものである。



もう一つ水中特攻には2人乗りの特殊潜航艇(略して特潜という)があった。魚雷2基を持ち攻撃後帰還できる兵器だが、ハワイの真珠湾、オーストラリアのシドニーおよび印度のマダカスカルの三つの戦例があるが、どちらも未帰還だった。乗員はもとより生還を期していなかった。



特攻平和観音堂改修費寄進者芳名録(敬称略)

一、寄進額 四百二十二萬七千円  
一、寄進者数 一千五十四名  
(平成十五年十月三日現在)

北海道

宮城

茨城

埼玉

吉田宝一	細谷賢吾	鈴木利美	坂本義穂	桑原久一	小野寺秀亨	大川宏	生方哲子	飯岡	岩手	平沢信一	芳賀誠治	中川一	田中正一	高橋房之	桜庭俊司	長内平	青森	森茂	西澤正守	西岡正	永原富雄	田中淑雄	高橋公平	椎名典義	小石川和雄	国本鎮雄	工藤重民	右近恒二	赤坂慎造	北海道						
田中直	佐藤久安	小石健喜	石井健助	福島長澤	高橋義順	工藤三九郎	小野寺景春	遠藤和子	石川三郎	山形	長谷山小五郎	関普兵衛	菅原秀男	佐藤源治郎	秋田	本間忠	高橋和夫	白鳥常治	佐藤胞治	木戸二郎	菅野五郎	狩野幸夫	金子茂平	岡田友治	潮田貞勝	板橋敏行	阿部敏行	宮城								
小山英一	小池みどり	黒澤雅之	角田方直	石川直	群馬	渡辺文雄	三上義三	増田純	堀井久雄	平井久明	那須利男	田中正義	高村正忠	杉山勝一郎	塩田勝一郎	後藤昔勝	木村義朗	浅野満祥	榎野	矢島孝雄	藤井達矢	中村好隆	堤正紀	関根賢治	関口秀明	佐藤兼基	菊地洋	川島義洋	小野清子	大井清茂	荒井茂	茨城	門馬秀行	花房フチ	降矢チ	
佐藤好之助	近藤藤	小島啓治	小久保隆成	小泉大宏	栗原久四郎	家弓正矢	金子秀	金久保	恩田賢	荻野光寿	小川晴志	小川利夫	大川利章	大戸正徳	大井誠一	内海みづ子	内山直子	臼田智之	伊藤直之	一井雄二	池田讓治	有田治	新井文央	新井重吾	新井嘉一郎	安孫子光	浅見甲三	秋葉哲郎	埼玉	茂木宏之	庭屋伸	佐藤保平	佐藤雄			
船江正春	藤原照誠	深野欣一	深井みよ	日高誠夫	橋口通夫	野口信夫	根岸佐勝	仁平慶紀	西岡慶	中村善治	中野泰夫	中野且重	長引と子	永井勝	飛澤裕	寺澤英俊	津田治男	種子田重孝	田中敏明	田中栄一	高畑易	高橋見太郎	高沢彰	園田慎夫	鈴木善雄	鈴木禧八	杉本律夫	菅野茂	神保勝光	陣内健春	白川元光	芝崎裕郎	塩野秀	佐藤義雄		
大橋省三	大田福太郎	大田龍吉	太田静吉	大賀博	宇佐美兵	今宮良三	井上晃一	稲葉由一郎	市川雄一	和泉重盛	出川盛夫	石引森	石橋美樹	石和郎	池本愈	飯森盛	安齊隆	荒川篤	安達鷹	相澤乾	千葉	渡辺忠良	吉住朝明	山本正	山内一	峯尾辰平	三浦安夫	丸橋静馬	松村茂	正木哉	真木昭	本多定彦	堀田弘	細田清		
林田美	浜田臣	馬場平	野中子	西村力	浪井利	夏村裕	中井光	中井久	中江仁	富澤清	戸部清	辻成	塚原一	田中賢	滝野洋	高山二	高橋秀夫	高梨正孝	関口康人	上井	崑	佐藤富	佐々木ひろ子	税所	小波和	後藤英夫	小島健三	黒川滋	工藤俊二	木原滋	川北等	川孝輔	金山重	門山也	片岡昌	岡本三
井川静男	飯田恒	飯田雅	飯田誠	安藤一	安藤彦	荒木しげ子	荒木剛	新井邦夫	新井	綾部	綾川	天野尚	穴正司	秋元仁	青木誠	相澤善三郎	東京	吉武登志夫	米山義郎	森井政守	元好	村上俊彦	武藤宏	三吉利和	宮間一	峯須健	三須健	前田嘉郎	本間嘉郎	鉢田昭	布施久	福嶋昭	平山昭	廣清	春山善	

大野俊康 大澤秀五 大沢秀夫 大坂俊子 大草知久 大草原三平 大内存己 遠藤紫一 海老澤善佐雄 江頭勇 江副保次郎 内田實郎 内田太郎 宇田正子 氏木武衛 植木真和 植松義信 岩田光三 岩間從夫 岩田敏英 伊摩正尚 井本英理 今泉五十二 今井潔昇 伊藤昇雄 市川国幸 市川雄正 板垣幸八 石原たかえ 石橋一歌 石橋千春 石井芳彦 池田治彦

木村喜代照 北島昌子 喜多正昌 城田弘道 木澤藤彦 菊永孝彦 菊地節央 神田延祐 神崎夢現 川村裕彦 川田三郎 川久保二 川内収 川野彰 茹野美照 神山子雄 鎌田文弘 蒲田誠喜 鎌田貞夫 加藤貞夫 加藤美二 加藤昌美 片桐和嘉 片山隆一 海野義孝 小沼恭之 小田達雄 小田四郎 小田治武 岡本久吉 大山大義 大田武保

櫻井忠成 坂上孝成 齊藤重孝 齋藤清一 近藤清秀 小室治郎 小湊武俊 小松陽太郎 小松嶺生 小松利光 小堀桂一郎 小林富士男 小林吉男 小林敏夫 小林忠彦 後藤俊生 後藤光夫 小塚高明 児塚高正 腰塚守正 五木博 河野楊三 小池禮三 小池芳衛 桑原彦豊 黒木清忠 倉澤信夫 熊本信夫 熊谷義夫 久保宗一 久保朗夫 国保正夫 國峰存一 京野五義 木村正一 木村元正 木村太郎

首藤良 須藤二 鈴木俊夫 鈴木崇文 鈴木一郎 鈴木吉男 杉山吉男 杉山勝春 杉田登夫 菅井和夫 神保富士男 新藤稔正 白石光会 少飛会 将子会 庄子敏会 下出忍 下出正尚 清水武次郎 志波末五郎 柴太正好 信富和男 重富二 塩野健二 澤田芳治 澤田武治 佐藤吉治 佐藤嘉男 佐藤幸由 佐藤重雄 佐藤由雄 佐藤直雄 定藤和操 佐藤達雄 佐々木正修

玉野英治 谷野武志 谷泰宏 田中悦男 田中正義 田中永信 田中市郎 伊達智恵子 多田龍二 田島幸二 竹森敏男 竹原虎男 竹田五郎 滝山和 滝波八重子 高橋弘 高橋光弘 高橋美 高橋敏夫 高橋彦二 高橋正典 高橋昭二 高橋洋子 高田賢一 高平芳一 園田進 曾我睦郎 曾我お子 副島郎 千田洋之助 千田重信 関田旭 関口志郎 関章

西村伸 西崎博 西野進 名執正 那須野正 那須桂三 南雲克博 永山康 中村博 中村梯 中村竹光 中村富正 中野富男 中野茂夫 長塚幹二 中曾隆 中曾慶 永瀬毅 長澤剛 中里英二 中河兵衛 豊田志彦 豊田辰史 富田泰治 富田誠一 寺田瑞俊 寺島茂彦 坪井幸一 角折幸輝 土屋六郎 土屋守郎 土田八也 辻吉彦 長村孝 長嶋春雄 玉置忠三

古畑昭二 古井貞方 藤本晴久 藤田久子 藤田満子 藤田真球子 藤田信雄 藤澤宏忍 藤井俊 福原茂俊 福田一安 深田清政 広本秀雄 広瀬文雄 廣嶋弘武 平原萬平 平原英二 原田武 林安 林聖二 林野明 濱野俊夫 馬場昭治 花塚真知子 服部敬七郎 長谷部平吉 乘兼英史 野寄勉 野口清男 野中辰三 野上洋郎 根木東洋 西山英一行

役山明 八木公 茂野安 盛野園 森尻男 森下忠 森定尚 森元麟 元井正 最上貞 村上山敏 武藤重夫 宮下成 宮崎八郎 三宅一 三宅靖一 宮城正晴 松本邦三 松永昭 松川信 松江子 松田雄 町田義郎 町田乾 升本修介 増田晴光 眞志田かず子 牧村久弘 前村弘 前江八郎 堀江正 細居俊司 細居正 細居俊司 星出七郎 古屋七郎

生	飯	飯	荒	阿	足	赤	青	青	神奈川	渡	渡	渡	渡	渡	和	和	陸士	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	横	湯	湯	山	山	山	山	山	矢	梁	安	矢			
田	山	野	谷	部	代	柴	柳	木		部	邊	辺	辺	辺	田	田	57期生	村	永	永	永	田	田	田	田	坂	澤	本	本	本	上	吹	川	田	代				
	茂		好	定	元	昌				重	博	貞	久	正	士		虎	治	賞	之	豊	雄	子	文	夫	枝	真	三	達	英	典	義	久						
瑛	雄	豊	昇	子	正	郎	男	香		歳	厚	隆	和	三	實	会		宛	治	賞	之	豊	雄	子	文	夫	枝	真	三	達	英	典	義	久					
吳	結	桑	熊	近	衣	衣	川	川	加	勝	片	柏	笠	甲	小	小	大	大	大	大	大	大	大	江	後	岩	岩	岩	今	井	井	伊	伊	井	市	伊	磯		
	束	原	谷	步	笠	笠	村	井	藤	又	木		井	斐	原	川	和	山	椀	塚	谷	賀	澤		松	下	崎	井	上	上	藤	藤	出	岡	田	矢			
正			一	駿	勤	恵美子	正	光	一	良		敏	正	申	正	司	夫	郎	元	之	平	啓	勝	裕	重	邦	潤	理	直	正	忠								
男	稔	嶽	淳	会	雄	二			子	郎	平	壽	弘	夫	三	三	司	夫	郎	元	之	平	啓	勝	裕	重	邦	潤	理	直	正	忠						修	
中	野	野	根	田	瀨	島	坂	廣	田	田	堤	津	辻	塚	竹	高	関	関	鈴	鈴	鈴	菅	白	白	白	白	清	島	柴	篠	澤	澤	佐	佐	酒	斎	斎		
	秋	正	勝	祥		孝	彦	二	男	猛	雄	紀	雄	吉	美	郎	晋	郎	久	久	衛	敏	道	四	浩	英	由	龍	玄	孝	榮	元	淳	高	正	忠	美		
直	則	忠	武	操	實	夫	稔	彰									一	五	五	衛	敏	道	四	浩	英	由	龍	玄	孝	榮	元	淳	高	正	忠	美			
細	星	星	藤	藤	藤	深	広	廣	平	平	平	平	開	秀	秀	秀	菱	樋	原	林	早	則	野	仁	西	西	新	新	鳴	奈	並	鍋	中	中	中				
川	野	原	本	本	田	川	瀬	川	山	山	林	野	平	嶋	嶋	沼	口	田	田	川	川	武	口	科	澤	川	實	倉	神	良	木	島	山	村	村	中	中		
昭	清	好	弘	一	和		治	隆	正	克		幹	岡	子	俊	直	博	雅	靖	尋	忠	清	長	哲	順	富	憲	長	慶	竹	竜	耕	家	徳					
夫	三郎	次	道	彦	孝	秀	巖	勉	二	三	行	巳	晃	勇	雄	定	子	雄	俊	博	雅	靖	尋	忠	清	長	哲	順	富	憲	長	慶	竹	竜	耕	家	徳		
重	小	山	山	丸	星	東	畑	能	中	関	鈴	坂	熊	工	新	陸軍航空隊奉賛人会	吉	山	山	山	柳	矢	森	望	門	宮	宮	南	満	水	三	丸	丸	松	松				
清	森	口	井	山	野	山	山	登	島	川	木	爪	倉	藤	馮	正	勝	田	田	田	下	崎	月	司	永	坂	重	谷	澤	山	田	土	井						
徳	正	春	治	昌	二	男	三	保	也	徹	昭	力	策	夫	会	勝	清	房	理	敏	秀	長	生	賢	親	笑	武	育	宏	豊	一	治	子	弘	雄				
男	明	治	昌	二	男	三	保	也	徹	昭	力	策	夫	会	勝	清	房	理	敏	秀	長	生	賢	親	笑	武	育	宏	豊	一	治	子	弘	雄					
田	黑	久	鎌	小	宮	中	武	滝	倉	菊	柄	上	伊	池	長	野	武	坂	小	影	赤	橋	中	福	八	村	野	中	青	石	茂	塚	樽	高					
中	木	代	倉	栗	本	原	多	沢	科	池	沢	村	藤	田	野	居	房	本	林	山	見	秀	本	島	木	八	村	野	中	青	石	茂	塚	樽	高				
成	史		澄	楓	了	千	邦	欣	国	芳	貞	淑	正	治	利	房	理	敏	秀	資	長	生	浩	喜	武	浩	清	三	周	光	弥	弘	道						
雄	林	明	基	勲	榮	正	学	夫																															
衣	河	加	尾	大	稲	板	安	青	愛	若	山	山	山	村	藤	日	野	中	飛	土	津	芹	佐	小	小	江	石	石	浅	静	松	林	花	島	丹	中			
川	辺	藤	澤	垣	津	藤	木	和	知	尾	村	下	崎	上	塚	比	口	村	田	井	川	沢	々	本	山	藤	原	野	岡	井	井	村	山	羽	川				
成	史			榮	忠	正	学	夫		芳	卓	一	重	武	温	哲	剛	正	章	文	信	三	玄	敏	敏	義	一	男	治	弘	忠	龍	卓	等					
雄	林	明	基	勲	榮	正	学	夫		芳	卓	一	重	武	温	哲	剛	正	章	文	信	三	玄	敏	敏	義	一	男	治	弘	忠	龍	卓	等					
井	京	山	福	羽	中	津	杉	近	滋	神	山	林	小	上	小	三	横	山	山	宮	丸	花	根	西	永	長	富	戸	谷	高	杉	杉	白	柴	小				
上	都	根	本	淵	村	淵	江	藤	賀	波	本	林	村	田	澤	重	井	本	崎	坂	山	井	木	田	田	坂	永	戸	谷	高	杉	杉	白	柴	小				
靖	史	敏	梁	之	介	年	信	雄		比	光	彦	夫	彦	夫	太郎	親	政	文	義	嘉	久	政	要	静	雄	昭	時	光	雪	武	茂	文	萬	邦	浩			

田中義文	田中三男	高橋俊雄	相馬太朗	杉田繁春	下野ふさ子	小林秀明	黒川昭夫	久田原巖	川村廉介	川崎敏夫	笠松澄子	岡山よし子	上木利正	岩崎禮三	磯部鉄男	池田辰二	飯野節子	大阪	村田敏郎	藤田三郎	藤木常武	仁熊栄次	中野玄三	田中千代野	砂野スマ	柴田きくこ	塩見正平	塩見正平	塩見正平	崎谷公一	京都航友会	川口俊雄	荻山力	大島俊雄	太田實毅	
吉田正	牧山徹	福山口秀	樋口茂	中村博	白石正	島田信一	川下浩	大井房	奈良	山本俊之	藤田寛	福井寛治	成田正光	富林敏雄	竹内信雄	國枝幹司	川田匡	柏谷哲哉	大村四郎	井原ユキ子	池淵	兵庫	波辺栄	吉村伊平	前田勇	星村清	藤村實	東井伍郎	日笠泰男	原笠昇	長谷初恵	中西九郎	中川好一	鶴巻昇		
原田義治	中山勉	豊島清	津田洋子	朝中尚武	山口幡夫	蓮池清士	成林四郎	中濱範夫	寺延茂	田村繁雄	佐藤三六	佐伯トシ子	桑原アヤ子	木川登	河合モト	蒲野明道	上野敏充	入江良男	伊藤茂	一橋次郎	広島	服部武志	十川昌子	高尾忠敏	瀬尾周	小野恒夫	小野慎吾	岡山	新田和子	上田紀元	鳥取	北澤寿朗	川嶋里美	和歌山		
神田正喜	川鍋貞二	川井美保子	加藤貞美	大神茂	上野十郎	上野十郎	市場敏司	池崎吉蔵	福岡	蒲原寅吉	金澤時郎	市川忠定	高知	永野博一	川人明美	愛媛	山本久徳	平田義和	久詰忠明	中條敏雄	辻芳子	北山キミエ	紙谷八十二	鎌田覚一	香川	三村文之	三木幹夫	高島國男	高木孝子	小川孝正	大橋	徳島	吉本信夫	山本精一	山根秋男	福本中央雄
向井嘉太郎	特攻殉国の碑保存会	末次富雄	柴田富雄	川瀬常道	一ノ瀬健二郎	長崎	山中治良	古川良	福田勲	菅原春生	川添正夫	尾形正夫	佐賀	山口東二	山口照夫	山本久徳	真鍋莊三	松尾弘	林岩男	新名啓祐	富永宮之助	手塚博文	津留敦	竹内あい子	森崎良彦	自在丸	重松正彦	笹宮公夫	佐々木澤人	後藤喜美子	倉元喜美子	草刈正一	清松孝彦	北橋孝彦		
吉田長一郎	峰守貴雄	前田洋	二間充	福田充	畠中健一	萩原健一	佐多直忠	泉寅一郎	鹿兒島	宮脇宗明	長谷川次男	中村次郎	飛松憲夫	田中ミチ	倉岡誠三	川野周平	伊黒忠義	吉原利徳	藤本茂雄	財津甚吾	久保一臣	和泉潤	生野文介	大分	古沢智	肱岡正	原田誠雄	成松孝男	恒松忠義	谷川義雄	高岡正雄	内田修二	池上博道	東本謙一	熊本	

沖繩

賀数恵輔  
金城重登  
田中耕三

お知らせ

9月23日、年次法要終了後世田谷山観音寺の客殿において、臨時理事会・評議員会が開催されて、以下の人事が議決されました。

イ、菅原道熙評議員の退任

ロ、深川 巖理事の退任

ハ、菅原道熙前評議員を理事に選任

ニ、体調を崩し理事長職の辞意を表

明した最上貞雄理事の申出を承認

ホ、後任として互選により菅原理事

事を理事長(職務心得)に選出

靖国神社での思い

この奥に友垣あまた鎮まるを  
思えばなどか胸迫りくる

二礼二拍手一礼の後、しばし佇み  
奥宮を見つめると、何か靈感を  
覚える。若くして国に殉じた戦友達。

富む春秋国に捧げし英靈に

済まぬ思いの八十路かな

浮かび出づ匂うが如き若武者の

み前に我は辿り来たりぬ

君が靈何処の枝に宿るらむ

大和心のこもる桜木

幽明の境除かるこの庭の

居並ぶ木々に靈こむるらむ